

愛の啓示——ノリッジのジュリアン：試訳—その2*

内桶 真二

15

第7の啓示は、幸福と苦難とをしばしば感ずることなど。そして罪によるものではなくとも、時になぐさめのない状態になる必要があること——15章。

この後、主は私の魂に、この上なき霊的歓喜をお与え下さいました。私はいかなる苦痛の恐れからも解放され、力強く支えられ、永遠の平安に満たされました。この心持ちはとても悦ばしく、はなはだ霊的なもので、私は全き平穏と安息のうちにあり、地上で私を悩ませるものは何もありませんでした。しかし、これはほんのつかの間しか続かず、私は見離されて、孤独にされ、我が身と生の重さに疲れて自らを呪い、生きる気力を持つことがなんとしてもできませんでした。私には、信仰と希望と愛以外に、慰めと安息はなかったのですが、実際のところそれらを持ち合わせてはいたものの、実感できることはほとんどありませんでした。そしてこのあとすぐ、我々のありがたき主は再度、私に魂の慰めと安息を下さいました。歓びと安らぎは恵みにあふれて力強く、この世のいかなる恐れも悲しみも苦痛も、私を悩ませることはありませんでした。それからふたび苦痛を感じ、それからまた嬉しさと歓びを感じ、あるときは一方、またあるときは他方と、何度も繰り返し、おそらく20回ぐらいは繰り返したかと思います。そしてその歓びの時には、聖パウロとともに、「キリストの愛から私を遠ざけるものはなにもなし」と言えるほどでした。そして苦痛の時には、ペテロとともに、「主よ、お助け下さい。死にそうです」と言えるくらいでした。

私の考えによれば、この幻視が示されたのは、あるときは慰めを手にし、あるときは信仰を失って孤独になることが好ましい、そういった魂がある、ということを示すためでした。苦しみの時にも歓びの時にも等しくしっかりと神は我々を養って下さっているということを、我々が知ることを神は望んでおられます。そして、魂のために、決して罪がその理由ではなくとも、人は時にひとりにされるのです。というのも、この時、私はひとりにされなければならないような罪は犯しませんでした。本当にそれは予想外のことだったのです。そしてまた、私はこの至福の心持を味わうにはあたらぬ者でもありました。しかし我々が主は、み心のままに惜しまず、至福を与えて下さいますし、時には我々が苦しむこともお許しになります。そしてその両者ともに、ひとつの愛によるものなのです。なぜなら、我々が力の限り自らを歓びのうちに置くことが、神のご意志なのです。神の恵みは永遠に続くものであり、一方苦痛は一時的なもので、救われるべき者にとっては無となるべきものであるからです。ですから神のご意志は、我々が悲しみ嘆きながら苦痛に翻弄されることにあるのではなく、一時にして苦痛を耐えしのぎ、絶えなき歓びのうちに我々が自ら身を置くことなのです。

第8の啓示は、死に赴くキリストの最後の悲しき痛み、お顔の色の变化、および肉体の乾きについて—— 16章。

この後、キリストは死を間近にした受難の一光景をお示し下さいました。乾いていて血がまったく付いていないうわしい顔を拝見しましたが、お色は悪く、死に赴く色でした。そしてそれから次第に死が迫ってくるにつれ、さらにお顔の色が悪くなり、死者の色となり、もだえ、そしてさらに死に近づき、青白くなり、またそれから一層土気色になりました。そう申し上げるのも、そのお方の受難は、とりわけありがたいお顔に、特に唇に表れているように私には思われたからです。そこに、私は4つの色を見ました。それは以前は生き生きと赤みが差し、見目麗しいお色でした。この重大な死、これは見るも悲しき変りようでした。そしてまた、乾いて鼻がくっつき、私の目にはありがたきお体がどす黒い色に映りましたが、すべては生き生きとしたお美しいお方自身のお色から、乾いた死へと変化したものでした。なぜなら、我々の主であり、救い主であられるお方が十字架の上で亡くなられたまさにその時は、乾いてごう音をたてる風が吹き荒れる、とても寒い日と私の目には映り、そして、尊き血があらん限り甘美なお体から流れ出した時でさえも、まだキリストの甘美な肉体には水分が残っているものと見えました。完全な出血と痛みとからなる内なる乾きと、外からの吹き荒れる風と寒さとは、キリストのありがたき肉体において一体となったのです。そしてこれら4つ、外からの2つと、内なる2つが、時の経過とともにキリストの肉体を乾かしたのです。この痛みは厳しく激しいもので、私には長い時間続いたように思われ、そしてキリストの肉体に宿る生き生きとした精神をも、すっかりと干し上げてしまいました。このように、私はありがたき肉体が減じるさまを目にしました。見たところ、少しずつ少しずつ驚嘆すべき痛みとともに、乾いていくように見えました。そして、キリストの肉体にいかばかりかでも精神の欠けらが残されている限り、そのお方は痛みにさいなまれたのでした。まさに旅立ちの時を迎え、最後の苦痛を耐え忍びながら死を迎える様子は、この長きにわたる苦しみのために、そのお方が死してからあたかも7日もの時が流れたかのように私には感じられました。そのお方が死してから7日も経っているように思えたとき申し上げたのは、ありがたきお体が徐々に死を迎えたため、死後7日も経過したかのようにはなはだ色を失い、とても乾き、非常に固くなり、見目恐ろしく、この上なくおいたわしく思えたからです。そして、キリストの肉体の死が、そのお方の受難のうちでも最大かつ最終的な痛みである、と私には思われたのでした。

4つのものによってもたらされた凄惨なキリストの肉体的な乾きについて。また悲痛な戴冠について。そして、本性に基づいてに愛する者にとってのこの上なき苦痛について—— 17章。

そして、この死に至る中で、キリストの「私わかたく」というお言葉が私の心の中に思い起こさ

れました。なぜなら、私はキリストに二重の「かわき」を見たからです。ひとつは肉体的なもの、もうひとつは霊的なものですが、後者については31章でまた申し上げます。というのも、私が思うに、この言葉は肉体から水分が失われた乾きのために示されたものであったからです。と言いますのも、ありがたき肉と骨とが血液も水分もない状態で放置されたのです。ありがたいお体は、くいに突通され、体の重みで引き絞られたまま、長時間、ただただ乾きました。というのは、ありがたいお手とお御足が柔らかであったがために、くいの大きさ、硬さ、そして鋭さによって、長い時間はりつけにされていたために、体の重みでお体が下へと下がり、傷が広がっていったのだ、と私は思いました。そして、頭を突通し、絞るように締め付ける冠。すべてが乾いた血とともに乾ききり、ありがたき髪が血で絡み、もつれ、乾いた肉がとげに、そしてとげが肉へと絡み付き、死が近づいて来ました。また当初、肉体がみずみずしく、出血している間には、絶えず刺さっているとげが傷口を広げていきました。そしてさらに、ありがたき皮と柔かな肉が、髪と血ともろともにとげによって辺り構わずたぐずたに引き裂かれたように骨から浮き上がり、それはあたかも垂れ下がった湿布が、自然な水分を持っているので、ぶら下がっている重さのために、急ぎはがれ落ちるかのようでした。そして、それは私にとって大変な悲しみであり恐れでもありました。なぜなら、肉が引き裂かれ落ちるのを見たいとは決して願わなかったのですから。どうしてそうなったのかは、私は目にはしませんでした。それは鋭いとげと、荒々しく激しく、取れないようにと無慈悲に冠を載せた結果だと思ひ至りました。

これはしばらく続きましたが、まもなく様子が変わり始め、私は見つめながら、どうしたことかと驚嘆しました。そして私はそれが次のようだと理解しました。肉が乾きはじめ、冠の重みを受けながら、肉が茨の冠に広がりはじめたのです。そして、冠をすっかりと包み込み、まるで冠の上にまた冠を載せたかのようにになりました。茨の冠は血の色で染まり、もう一方の冠と頭はみなひと色、血が固まって乾いた時の色でした。お顔やお体の肉の皮と思えるものは少なく、しわが寄って黄褐色になり、焼きを入れた木の板が乾いた時のようでした。そしてお顔はお体よりも一層土気色でした。私は4つの乾きを目にしたのです。ひとつは出血により血が無くなったためのもの。2つ目はその後の苦痛によるもの。第3には、布を乾かすために干すように、空中に吊るされたことによるもの。第4には、体の自然な営みは水分を必要としたものの、キリストがあらゆる苦痛や苦悩にさいなまれている間に、いかなる手助けも施されなかったことによるもの。ああ、なんと堪難く過酷なものだったのでしょうか。そのお方の苦痛は。ですが、さらに一層堪難く過酷だったのは、水分が無くなり、あらゆるものが乾きはじめ、このように干からびた時でした。ありがたき頭に表れた痛みは、次のようなものでした。ひとつは、死に往くお方にまだ水分があるうちにもたらされたもの。もうひとつは、そのお方を強風が外側から一層乾かしていくために、縮みながら乾いていくゆっくりとした痛み。そして、寒さによって痛みを加え、それは私の想像を超えるものでした。そして、ほかにも痛みはありましたが、それらについて私が申し上げられることは、ほんのわずかに過ぎないことが分かりました。なぜなら、それは語るができないものであるからです。

キリストが味わったこの苦痛の啓示によって、私は痛みで満たされました。なぜなら、私はそのお方がひと度しか苦しめられなかったことを存じてはおりましたが、まさにそのお方は、私にお示しになることを望まれたように苦しめられ、私が以前に願ったように、私を受難の心持ちで満たすことを望まれたのでした。そして、キリストが苦しめられている間中、私にはキリストの苦しみ以外の苦

しみは全く感じられませんでした。それから、「自分がお願い願った痛みがどんなものであるか、ほとんど何も知らなかった」と思いました。そして、愚かであったと自らを悔いました。というのも、それがどんなものか知っていたのなら、お願いなどしなかったものを、と思ったからでした。なぜなら、その私の経験した痛みは、肉体の死を超えた痛みである、と感じられたからです。「このような痛みは外にあるのだろうか」と考えました。すると心の中に答えが聞こえてきました。「地獄もまた痛みなり。絶望あるが故に。しかれども、救いへと連なる痛みのうち、最大の苦痛はこれなり。汝の愛する者が苦悶する姿を目にすること」いったい、私の命そのものであり、私の恵みそのものであり、私の喜びそのものであるお方が苦しまれるお姿を目にする以上の痛みがありましようか。ここに私はまことに感じました。私はキリストを、自分自身を愛するよりもずっと愛しており、そのお方が苦悶しておられるのを目にした際に感じた以上の悲痛を感じるなど、有り得はしないのだと。

18

我らが聖母と、キリストを愛する外の者たちとの、精神的殉教について。そして良きものも、悪しきものも、あらゆるものが、いかにキリストとともに苦しんだか——18章。

ここに私は、我らが聖母マリア様の哀れみの一部を見ました。なぜなら、キリストと聖母はとても深い愛でひとつに結ばれていたために、キリストに対する聖母の大きな愛が、聖母の大きな苦痛のもととなったのです。というのも、私はここに恩ちょうによって保たれ、被造物がキリストに対して持つ自然な愛の本質を見たのです。この自然な愛は、キリストのありがたき母上にこの上なく豊かに表れており、そしてまたあふれんばかりのものだったのです。なぜなら、聖母がキリストを、外のいかなるものよりも愛すれば愛するほど、聖母の痛みは外のあらゆる痛みをしのぐことになるのですから。なぜなら、その愛が気高く、強く、やさしいものであればあるほど、愛する者の肉体が苦痛にさいなまれるのを目にすることは、愛する者にとってそれだけ一層悲しいものとなるからです。そしてキリストのすべての弟子たちと、キリストを真に愛する者たちもみな、自分自身の肉体的な死よりも激しい痛みを耐え忍びました。なぜならば、私の感覚からすると、その者たちのうちで一番取るに足らぬ者でも、自分のことよりもずっとキリストのことを愛しており、その苦痛が筆舌に尽くしがたいものであったことは、疑う余地はないからです。

私の理解によれば、私はここにキリストと我々との強い絆を見て取りました。なぜなら、キリストが苦痛にさいなまれていたとき、我々も苦痛にさいなまれていたのですから。そして、苦痛を味わうことができるものはみなキリストとともに苦痛を味わいました。つまり、我々の役に立つようにと神がお造りになったすべてのものが、苦痛を味わったのです。キリストの臨終に際して、天空と大地とが、悲しみのために、その本来の活力を失いました。なぜなら、キリストを自らの活力の源である神として知ることは、それらの本来の特質だからです。キリストが力を失ったとき、それらもキリストとともに、痛みへの共感から、可能な限りに力を失うことが自然であり適切なことだったのです。そしてこのようにして、キリストの友人たちは苦痛を、愛ゆえに、味わったのです。そ

して広く皆が——すなわち、キリストを知ることがなかった者たちが——神の知られざる力強い養い以外のあらゆる慰めを失ったため、苦しむこととなったのです。私は二種類の人々を思い描いています。それは次のふたりによって理解されることでしょう。ひとりにはピラトであり、もうひとりにはフランスの聖デオヌシスですが、当時デオヌシスは異教徒でした。というのも、デオヌシスがその時に現れた不可思議で驚くべき悲しみや畏ろしい光景を目にした際に、デオヌシスは次のように述べたのです。「世界が終りを迎えたか、自然を造られた方が苦しんでおられる」そうして、デオヌシスは祭壇に「これは未知なる神の祭壇なり」と書かせました。神は善性から、天体や自然の力が本来の役割どおり、幸いなる者にも、呪われし者にも役立つように取り計らっておられますが、その時に、神は両者から身をお引きになったのです。そして、当時悲しんだのは、神を知ることのなかった者たちだったのです。

こうして、我らが主イエスは、我々のために辱められ、そして我々はこのようにイエスとともに辱められたままなのです。そして、後に述べるように、神の恵みを手にするまでは、我々は辱められたままなのです。

19

心安らかに十字架を見つめること。また、魂の同意がない肉の欲はいかに罪とはならないか。そして、肉と魂とがキリストにおいてひとつになるまでは、肉は耐えつつ、苦痛のうちにあらねばならぬこと—— 19章。

この時、私は十字架から目を離して見上げてみようかと思いましたが、控えました。なぜかというと、十字架を見つめていれば、自分は安全で、安心だ、と承知していたからです。ですから、私は自らの魂を危険にさらす気にはなれなかったのです。なぜなら、十字架の周りでは、悪魔たちが先陣を我がものにしようと競い合っており、まったく安心など欠けりも無かったのです。すると心の中に、親切心からの申し出だ、と思われる声が聞こえてきました。「その者の父君を見るため、面を上げ、天を見よ」と。そして、十字架と天とのあいだに私を害するものは何も存在しないということは、信仰においては承知しておりましたが、見上げるかどうか、答えざるを得ないと思いました。魂のありとあらゆる内なる力を振り絞って、私は心の中で、「いいえ、それはいたしかねます。なぜならあなた様が私の天国なのですから」と答えました。私がそう言ったのは、天に昇りたくはなかったからなのです。というのは、そのお方に依らずして天に昇るよりも、最後の審判の日までその苦痛の中にいたかったからなのです。なぜなら、私をこのように厳しく罰したお方、必ずやそのお方ならば、お望みになれる時に私を許して下さいはず、と私はよく承知していたからです。こうして私は、自分の天国としてイエスを選ぶということを教えられました。もっとも私は当時、苦しまれているお姿でしかそのお方を存じませんでした。私にはイエス以外の天国は好ましいものではありませんでした。なぜなら、そのお方は私がそこに至る時、私の至福となるお方なのです。そして、この受難と悲しみの時に、イエスの恵みを得て、そのお方を私の天国に選んだというこのことが、ずっと長いこと私にとってひとつの慰めとなっておりました。そしてつま

りそれが、健やかなる時も苦しき時も、常に私の天国としてイエスのみを選ぶべし、という教えなのでした。

そして、取るに足りぬ罪深き者である私は——以前申し上げたようにどんな痛みか前もって知っていたなら、願い願ひなどはしなかったものを、と——後悔いたしました。ここに真に悟ったのです。それは魂の同意なしの肉のつぶやき、悪態であったと。ですが、これについては、神はとがめだてしたりはいたしません。後悔することと、意志をもって選択することは、その時の私がひとつのことに感じた相対する2つのことがらです。そして、それはふたつの部分から成っています。ひとつは外的なもの。もうひとつが内的なものです。外的なものは、今苦痛と苦難の中にあり、そして現世ではきっとそうしたもののなのでしょう。我々の罪深き肉のなものです。この時に私はこのことを強く感じましたし、それが後悔した部分でした。内的な部分は、まったくの平安と、愛のうちに高みにある祝福された営みで、これはより密かに感じ取られたものでした。そしてこちらこそが、私が強く懸命に、心の底から私の天国であるイエスを選ぶところなのです。そしてここに私はまじまじと、内なる部分が、外なる部分の主人であり君主であり、そして外なる部分の命令を聞いたり、意思を思い計ったりすることはなく、すべての意図や意思は、我々の主イエスと永遠にひとつになるために決定されるものだ、と理解しました。外の部分が内の部分を導いて同意に至る、という道筋は示されませんでした。そうではなく、恵みによって内なる部分が外の部分を導くのです。そして、両者が至福のうちに、キリストのおかげをもって永遠にひとつになるのです。このことが示されたのでした。

20

キリストの言語を絶する受難について。また受難に関して常に記憶すべき3つのことがらについて——20章。

そしてこのようにして、我らが主、イエスが衰弱していかれるお姿を、私はしばらく見ておりました。というのも、神性との一合が、人性に対し、すべての人がよく耐えうる以上に、愛のために耐える力を与えてくれたのでした。つまり、すべての人が耐え忍ぶことができる以上の苦痛というだけではなく、そのお方は、原始から最後の日までの、すべての救われるべき人が理解し得る以上の、あるいは十分に考え得る以上の苦しみを、最高位におられるありがたき王の誉れと、惨めで憎むべき苦渋に満ちた死とを考慮に入れながら、耐えられた、ということなのです。というのも、最高位におられ、最も誉れ高きそのお方が、全く完膚なきまでにおとしめられ、この上なく軽蔑されたのですから。なぜなら、受難のうちで理解されるべきことがらの精髓は、苦しまれた方がどのような方であるかを考え、それを知ることなのです。

そしてこれに際し、そのお方は、栄えある神性の気高さと高貴さを、心の中に少し見せて下さいました。そして同時に、ありがたきお体の大切さと、柔和さも見せて下さいました。これらはひとつに結びつけられるべきものなのです。そしてまた、我々の自然な本性のうちにある、苦痛を嫌う性をも見せて下さいました。なぜならば、そのお方は、最も柔和で汚れ無きお方であったのに加え、

最も果敢に、最もよく苦痛に耐えたお方でもあったからです。そしてそのお方は、救われるべきひとりびとりの罪のために苦しまれたのです。そしてすべての人の悲しみと寂しさを目にされ、自然な本性と愛ゆえに、苦しまれたのです。というのも、聖母がそのお方の苦しみをお嘆きになったのと同じように、そのお方は聖母が苦しまれたために、苦しみを耐え忍ばれました。そしてそれ以上に、そのお方の人性はもともと、より誉れ高きものなのです。なんとなれば、そのお方は耐えられる限り我々のためにお耐えになり、我々のために苦しまれたのです。そして今やそのお方は復活され、もはや苦しまれることはなくなりましたが、今でも我々とともに耐え忍んでいらっしゃるのです。

そして、そのお方の恵みを通じて、これらすべてを見つめながら、そのお方が我々の魂に対して持っておられる愛は、とても強いものであり、そのお方は決然と、大いなる願いを込めて苦痛を選びとり、謙虚に、大いに満足して苦痛を忍ばれたということ、私は見て取りました。というのも、このように、それを見つめる魂は、恵みに触発されている際に、キリストの痛みが、まさにすべての痛みを超越しているものだということを目にするのです。それはつまり、その痛みが、キリストの受難のおかげをもって、永遠に続くあふれんばかりの喜びへと変えられるものである、ということなのです。

21

キリストの受難を見つめる、3つの見方について。そして今や、我々はキリストとともに十字架の上で死なんとしているが、そのお方のお色が、いかにすべての苦痛を消し去るか——21章。

私の理解では、我々が受難に対し3つの見方をすることが、神のご意志なのです。まず始めに、そのお方が耐え忍んだ苦痛を、痛悔と同情心とをもって見る。そしてこの時に、我らが主はそのことをお示しになり、私に苦痛を見るための力と恵みとを与えて下さいました。私はあらん限りの力を振り絞って、そのお方の旅立ちを見つめ、そのお方の肉体がすっかり死に至ったかと思ったのですが、そうではないことがわかりました。そしてまさに時を同じくして、どう考えてみても、もやは生きながらえることはできないだろうし、終末の啓示も当然のものとして私には思われましたが、私がおのと同じ十字架を見つめていると、突然、そのお方のありがたきお顔の表情が変りました。そのお方のありがたきお顔の表情が変わったことで、私の顔つきも変わり、私はこの上なくうれしくなり、快活になりました。すると我らの主が喜々として、私の心にお言葉をもたらしたのです。「さあ、受難の苦痛や、汝の嘆きに、何の意味があろうぞ」そして、私はすっかり快活になりました。主のお心づもりでは、我々は今、そのお方といっしょに十字架の上におり、死へと向かいながら、苦痛と受難を経験しているのだ、と私は理解しました。そして我々がそのお方のご助力と恩ちょうを得て、最後の瞬間までその十字架にとどまっていると、突然、そのお方は、我々に見せる顔色をお変えになるのです。そして我々はそのお方とともに天国へと参るのです。現世と来世の間には時間の隔たりはなく、そこでは、すべての者に喜びがもたらされます。そして、この啓示において、そのお方はそのように意図しておられます。「汝の痛み、あるいは汝の苦難の、どこに意味があろうぞ」

と。そして、我々はみな十全に祝福されることになるのです。

ここに私は、そのお方が恵みに満ちたお顔を今我々に見せて下さったのならば、地上にもどこにも我々をさいなむ苦痛はなく、すべては我々にとって喜びであり恵みであるはずだ、と強く感じました。しかし、そのお方が、この世で担った受難の時と、十字架とを、我々にお示しになるのですから、我々は自らの弱さのままに、そのお方とともに苦しみ、もがくのです。そして、なぜそのお方が苦しまれるのかというと、そのお方の至福の中で、そのお方の善性から、ともに我々を高めへいざなおうと願っておられるからなのです。そして、この世で経験するこのほんの小さな痛みのおかげで、我々は、高らかに、終りなく、神を知ることとなるのです。これは、この痛みなくしては不可能なことなのです。そして、十字架の上で、そのお方とともに経験する痛みが、激しいものであればあるほど、我々の誉れはそのお方のみ国で、一層大きなものとなるのです。

22

第9の啓示は、天国の3つの喜びなどについて。そしてたとえその必要がなくとも、できるのであれば、我々のために苦しむことを日々願っておられるキリストの無限の愛について——22章。

その後、我々の主、イエス・キリストがお尋ねになりました。「我が汝のために苦しんだことに、汝は十分満足しているや、いなや」と。私は、「はい、善き主よ。ありがとうございます。もちろんです、善き主よ。あなた様が祝福されますように」と、申し上げました。すると、我々のやさしき主であるイエスが言われました。「汝が満足であれば、我も満足なり。我が汝のために受難を耐え忍んだことは、我が喜び、至福、尽きることなき歓喜である。そして、我がさらに苦しむことができるのであれば、喜んでもっと苦しもうぞ」このように感じながら、私の心は天上へと引き上げられ、私はそこに3つの天国を目にし、その光景に大いに驚きました。そして私は3つの天を目にはしましたが、すべてはありがたきキリストの人性のうちにあるものなのです。どれをとっても、より優れているということも、より劣っているということもなく、またより高いということも、より低いということもなく、みな等しく至福に包まれているものなのです。

なぜなら、キリストは私に第1の天国として父なる神を、肉的なお姿としてではなく、父なる神の特質と、父なる神の働きとしてお見せ下さいました。つまり、私はキリストのうちに父なる神がいることを見たのです。父なる神の働き、とはこうです。父なる神は、み子であるイエス・キリストに報いを与えます。この贈物、すなわちこの報いは、イエスにとって至福に満ちあふれたものであり、父はこれ以上に子の気に入る報いを与えることはできません。第1の天国は、それはすなわち父なる神の喜びのことですが、私にはひとつの天と見え、そしてとても至福に満ちあふれたものでした。なぜなら、父はイエスが我々の救済のために行った数々の行いにすっかり満足しておられるからです。ですから、我々はキリストのあがないゆえにキリストのものであるというばかりではなく、またキリストの父のありがたき贈物によって我々はキリストの至福であり、我々はそのお方の報いであり、我々はそのお方の誉れであり、冠でもあるのです。そうです、このことは特別な驚きであり、とても喜ばしい光景なのです。我々がキリストの冠であるということは。

私が語っているこのことは、イエスにとってとても大きな至福であるので、イエスは自らのあらゆる労苦や、大変な受難、また残忍かつ辱めを受けた死を、一向に気にかけてはおりません。そして、次のように申されます。「もしや、もっと苦しむことができるのであれば、喜んで苦しまん」私はここに実にまざまざと、イエスはできるのであれば何度でも死することを望まれ、そうするまでは、愛がイエスに休息することを決して許さない、ということを見て取りました。そして私は、かのお方が、できるのであれば一体何度死するお考えなのか、知りたくて懸命に見つめましたが、おかしなことに、その数字はあまりに大きすぎて頭を素通りし、私にはまったくもってわかりませんでした。そしてイエスはそのように何度も死した、あるいは死する定めにあったのに、それでも愛のために何事もなかったように振る舞われることを望まれました。なぜなら、そのお方にとって、そのお方の愛に比べればすべては取るに足りないことであったからです。というのも、ありがたきキリストの人性は一度しか苦しむことができませんでした、キリストにおける善性は決して贈物をやめることがないのです。日々、可能な限り、手を差し伸べる準備が万端に整っているのです。なぜなら、そのお方が私の愛のために新しく天と地とを造ると約されれば、それはたやすいことなのです。なんとすれば、そのお方が望まれれば、このようなことは何の雑作もなく日々行われ得ることだからです。ですが、人の理性を超えるほどの回数にわたって、私への愛のために死するということは、私の考えでは、神が人の魂に提供し得る最高の贈物だと思います。

そうして、そのお方は次のように意図しておられるのです。「では、汝への愛のために我ができる限りのことを尽さない、としたらいかん。そのような行いが我を苦しめることなし。なぜなら、我は自らのひどい苦しみを顧みず、汝への愛のために何度も繰り返し死ぬることを欲したのであるから」そしてここに、私はこのありがたい受難を2度目に凝視するにあたって、そのお方を苦しめることとなった愛とは、天が地上のはるか上にあるように、そのお方のあらゆる苦痛をはるかにしのぐものであることを理解しました。なぜならば、その苦痛は、かつて愛の働きによってなされた気高く、誉れ高い行いであるからです。そして、愛は太古から存在し、今もあり、永劫にわたって存在し続けるものなのです。この愛について、そのお方は次のようにすばらしいお言葉を述べておられます。「もし我がさらに苦しむことができるのであれば、さらに苦しもうぞ」そのお方は、「我がさらに苦しむことが必要なら」とおっしゃられたわけではありません。というのも、そうすることが必要がないとしても、可能であればそのお方はそうすることを望まれるのです。我々の救済に関するこの行い、このみ業は、神ができうる限りに整えられました。そして私はここにキリストにおける十全な至福を見ます。なぜなら、キリストの至福は、もしさらによいものにできるのであれば、十全な至福であるはずはなかったのですから。

23

キリストは、キリスト自らとともに我々が我々のあがないを喜びことをどんなに望んでおられるか。そして、そうすることができるように、我々がキリストの恵みを願うことをどんなに望んでおられるか—— 23章。

そして、次の3つのお言葉、「それは喜び、至福であり、我にとりてこの上なく好ましいことなり」のうちに、3つの天国が示されました。そしてそれは、以下のものです。喜びについて、私は「父」の喜びを理解しました。そして至福については、「子」の誉れを。そして、この上なく好ましいこととしては「聖霊」を。父は喜び、子はあがめられ、聖霊は満ち足りておられます。そして私はここに、ありがたき受難を観想すること3度目にして理解しました。すなわち、受難に満足するキリストの喜びと至福とを目にしたのです。というのも、我々の思慮深き主は、私に5通りに受難をお示しになったのです。そのうちの第1は、頭部からの出血。第2はお顔から血の気が引いたこと。第3は鞭打たれたお体にできた傷からの大量出血。第4は深い死。これらの4つについては、受難の苦痛として以前に申しました。そして5つ目が、受難の喜びと至福として示されたのでした。というのも、我々が自らの救済について、神とともに心から喜ぶということが、神のご意志だからなのです。そしてそこで、我々が力強く慰められ、勇気づけられることを、神は望んでおられ、また、我々の魂が神の恵みで満たされることを、楽しげに望んでおられるのです。なぜならば、我々は神の至福であり、神は我々のうちに終りなく喜びを見いだされ、そうして我々も神の恵みを得て、未来永劫にわたって神に喜びを見出すものなのです。そして、そのお方がこれまでになされたこと、今なされること、そしてこれからなさること、のすべては決してそのお方には重荷でも負担でもありませんでしたし、そのはずもなかったのです。ただその方が我々の人間性に関してなされたことといえば、ありがたきご誕生から、復活祭の朝に復活するまで、我々のあがないのための重荷と負担を、実際の行為を通じて背負われた、ということなのです。そしてその行いを、以前申し上げましたように、そのお方は際限なく楽しまれるのです。

イエスは我々が、ありがたき三位一体神のうちにあり、我々の救いとなる至福に心を砕き、以前申しましたように、そのお方の恩ちょうを得て、できうる限りに霊的な喜びを願うようにと望んでおられます。それは言い換えるなら、我々の救済を喜ぶということは、我々がこの世に生きているうちに、キリストができうる限り我々の救済を喜ぶことである、とたとえられましょう。三一神がキリストの受難においてなさったことのすべて、あふれんばかりの徳や恵みを、そのお方を通じて我々にお贈り下さりながら、しかしながら、聖母のみ子ただお一方が苦しまれたこと。このことすべてを、ありがたき三一神は永遠に喜ばれているのです。そしてこのことは、次のお言葉に示されています。「汝は十分に満足したやいなや」そしてキリストのおっしゃられた「汝が満足なら、我も満足なり」という別なお言葉によっても。それはあたかも次のようにお述べになっているかのようでした。「さあならば、我には十分な喜びであり、満足である。我は汝に我の労苦に対する何の対価も一切求めぬこととせん。もし我が汝を十分に満足させたのであらば」

そしてこのお言葉によって、主は、気前よく人にもものを分け与える人の性質を、私に思い起こさせました。好んで人にもものを分け与える人は、分け与える物にはとん着しません。望み願うことは、なにかを自分が与える人が喜び、慰められる、ということだけなのです。そしてもし受け取った人が、贈物をありがたく思い、感謝してくれれば、親切な贈り手は自分が愛する者が喜んでくれて、元気づけられたことに対する喜びとうれしさによって、自らの出費や苦労をものもしないものなのです。あふれんばかりに、十全にこのことが示されました。また、この「これから」という語の大切さについて、よく考えを巡らせて下さい。なぜかというと、そこに、キリストの受難から発するあまたの喜びとともに、そのお方が我々の救いに対してもっている高度な愛の秘密がある、と示され

たのですから。ひとつは、そのお方は自らの行いでそれを成し遂げられたことを喜んでいらっしやり、そしてそのお方はもう決して苦しめないこと。もうひとつは、そのお方は我々を天国へとあがなって下さり、我々を自らの冠として下さり、永遠の至福として下さっていること。そしてもうひとつは、そうすることによって、我々を地獄の限りなき苦痛から救ってくださったこと。

24

第10番目の啓示は、我らが主イエスが、ありがたき自らのお心が2つに裂かれるのを、歓びながら、愛のうちにお示しになられること——24章。

それから、喜色満面のお顔で、我らが主は喜びのうちにご自分のわき腹をのぞき込み、見つめておられました。主がいとおしそうに傷口を見つめておられると、私の理性はまさにその傷口のところから、主のお体の内部へと導かれました。そしてそれから主は、美しく喜ばしい場所を、救われるべきすべての人にとって十分な広さがあり、みな愛と平安のうちに安心して憩うことができる場所を、示して下さいました。その後、主は、この上なくありがたい血と貴重な水分のことを思い起こさせて下さいました。愛のために、主はそれらをすべて流れ出させたのです。そしてありがたく見つめていると、主はありがたき心がまっ二つに引き裂かれる場面を示して下さいました。そして、この無上の喜びとともに、主は私の理性にありがたき神性の一部を見せて下さいました。鈍重な魂が理解するにはあまりにも鮮烈すぎるほどに、と言えるほどです。それはつまり、いにしえからあり、今も存在し、未来永劫にわたる無限の愛なのです。そしてこれとともに、我々のよき主はたいそう至福に包まれて、「さあ、いかに我が汝を愛したことか」とおっしゃいました。それはあたかも次のおっしゃっておられるかのようでした。「いとおしき者よ。凝視せよ。汝が主を、汝が造り主であり、汝が尽きせぬ喜びである汝が神を見よ。汝の救済が、いかほど我が喜びであり至福であるか、悟るべし。しかる後に、我が愛故に、我とともに喜びを分かち合おうぞ」そして、よりよく理解できるようにと、次のありがたいお言葉が述べられました。「さあ、よく見て、理解せよ。いかに我が汝を愛したことか。我は死ぬる前に汝をこよなく愛し、汝のために死すことを欲したのである。そして今や汝のために死し、耐えうることは好んで耐えた。さて、今や我のあらゆる悲痛とすべての苦痛とは、我と汝にとり、尽きることなき喜びと至福となった。今や汝が、我が好むところを請い願ったとしたら、我がそれを喜んで汝に許さぬことなどがあり得ようか。なんとすれば、我が喜びは、汝の神聖さ、汝の尽きせぬ喜び、そして汝が我とともにある至福なのであるから」これが、このありがたい、「さあ、いかに我が汝を愛したことか」という言葉について、私ができる限りやさしく言えることです。これをお示しになったのは、我々のよき主が、我々を喜ばせ、楽しませるためであったのです。

25

第11番目の啓示は、かのお方のいとありがたき母上を靈的に、見事にお示しくださったこと——
25章。

そして、まったく同じ明るさと喜びにあふれた表情で、我らがよき主は右側をご覧になり、私の心を、受難の折に我らが聖母がお立ちになっていた場所へと、お導きになりました。そして、「汝は母を見ることを欲するや」とおっしゃいました。このやさしきお言葉で、そのお方は次のようにおっしゃっているようでした。「我がありがたき母を見んことを汝が欲しておることはよく承知しておる。何となれば、我を除けば、汝に示すこと能う最高の喜びは、我が母なれば、我にとり、至高の喜びかつ誉れなり。かつまた母は、我が被造物のうちで最も見ることを望まれるものなり」

そして、そのお方がこのありがたき乙女、至福の母、我らが聖母マリアに対して抱いている特別で、驚嘆に値し、まれなる愛ゆえに、そのお方は、聖母がとても楽しまれているお姿をお示しくださいました。それはあたかも次のありがたいお言葉のように、そのお方が語っておられるようでした。「汝は我がいかに母を愛しておるか悟ったか。我が母を愛する愛と、母が我を愛する愛とのうちに、汝が我とともに歓喜することが可能となるようにと愛しておることを」そしてまた、このありがたいお言葉をもっとよく理解できるようにと、我らが主は救われるべきすべての人に対して、あたかもそれがひとりの人であるように、次のようにおっしゃられるかのように、話しかけられます。「聖母のうちに、汝がいかに愛されているか見て取りたいか。というのも、汝への愛ゆえに我は聖母を高貴に、気高く、誉れ高く造ったのだ。そしてこのことは我も気に入っておる。ゆえに我は汝もそれが気に入ることを欲す」なぜなら、そのお方自身を除いては、聖母が最も見目麗しきものであるからです。ですが、この点に関して、この世にあるうちに、聖母の肉体的なお姿を目にすることを願うようにと、教えられたことはありません。そうではなく、聖母のありがたき魂の徳を請い求めるようにと、教えられました。聖母の真実、知恵、愛を。そうすることによって、己を知り、恭しく我が神を畏れるようになるであろうと。そして我らがよき主がこれをお示しになり、「汝は聖母を見ることを欲するか」とのお言葉をお述べになられたとき、私は答えて申しました。「はい、よき主よ。ありがとうございます。はい、よき主よ。御意のままに」私はこのことをしばしば祈り、肉体的なお姿で聖母を見たいと願ってはおりましたが、そのように聖母を目にする機会はありませんでした。そしてイエスはそのお言葉のうちに、聖母の靈的なお姿を私にお示しになりました。まさに以前拝見したように、小さく、純粋なお姿で。そしてその時、主は聖母を、気高く、高貴で、誉れ高く、すべての生き物のうちで主にとって最も好ましいものとしてお示しになりました。そして主は、主を好もしく思う者がみな、聖母をも好もしく思うべきであり、そして主が聖母を好もしく思い、聖母が主を好もしく思うその思いのうちにみながあるべきである、ということが知られることとお望みです。そして、さらに一層よく理解できるようにと、そのお方はこの例を示してくださいました。もし、人がどんな生き物よりも特にある生き物を愛しているのであれば、その者は自分がたいそう愛しているその者をみなに愛してもらい、気に入ってもらいたいと考えるものである、と。そして、イエスが「汝はマリアを見ることを欲するや」とお尋ねになられたこのお言葉を、そのお方が私にマリア様を靈的にお示しになられながら私におかけくださるのに最もふさわしいマリア様についてのお言葉だと感じました。なぜなら、我らが主は外ならぬ聖母マリア様を私にお示しになったのですから。そしてマリア様を、主は3度お示しになられました。はじめは、マリア様が

生みの苦しみを耐えておられるお姿。2番目は十字架のもとで悲しみにうちひしがれておられるお姿。そして3番目が、今やうれしく、栄光にあふれ、お喜びに満ちあふれているご様子。

26

第12の啓示は、主である我らが神とは、ただただ至上の存在であるということ——26章。

そしてこの後、以前に拝見したときよりも、我らの主がより威厳を帯びたお姿をお示しになったように思います。そしてここに、私は教えられたのです。そのお方こそがまったき喜びであり、気取りなくやさしく慈愛にあふれ、生命そのものであることを我々の魂が知り、そのお方のみ前に我々の魂が進み出るまでは安息を得ることはない、ということ。我らが主、イエスは、しばしばおっしゃいました。「我なり、我なり、至高のものは我なり。我なり、汝が愛するものは。我なり、汝が好むものは。我なり、汝が仕えるものは。我なり、汝が求めるものは。我なり、汝が望むものは。我なり、汝が欲するものは。我なり、すべては。我なり、聖なる教会が汝に教え説くものは。我なり、ここに汝に示されたものは」そのお言葉の数々は、私の知恵や、あらん限りの理解力や、全身全霊の力をもってしても、及ばないものではあります。私には至高のものと思われまます。というのも、そこにすべてが込められているからです。それについて、語ることは私にはできません。ですが、それらが示されるのを目にした際の喜びは、心が望みうる最高のもの、魂が欲しうる限りのものでした。ですから、そのお言葉はここにつまびらかにはいたしません。ですがそれは、みな、理解力と愛の強さに応じて神から与えられる恵みにしたがって、主のみ心のままに、ひとりひとり受け取るものなのです。

27

第13番目の啓示は、我らが主である神は、偉大な気高さのうちに自らがなされた創造のすべてなどを、我々がよく尊重することを望んでおられること。そして苦痛によるのでなければ罪を知ることとはできないこと——27章。

主はこの後、私が以前主に対して持っていた望みを思い出させて下さいました。そして私は、罪こそが私の行く手を阻んだものだ、と理解しました。それ故に、広く我々みなを見つめてみました。そして、罪が存在しなかったのであれば、主が我々をお造りになられたままに我々はみな清らかで、我らが主のようであったのに、と思われました。そしてこのように、自らの愚かさのためなのですが、このとき以前は、なぜ先見の明ある神の大いなる英知によって、罪の起こりが妨げられなかったのかと、よく疑問に思っておりました。なぜなら、そうであればすべてがうまくいっていたはずだ、と私には思われたからです。このように心が騒いだことは、容易に見過ごされるべきものではないのですが、それにも関わらず、いわれなく、見境なく、私は嘆き悲しましました。しかしイエス

はこの幻視において、私が必要なものすべてをお示し下さっているのですが、このようなお言葉でお答えになりました。「罪は望ましきものなり。しかし、すべてはしかるべく、すべてはしかるべく、そしてあらゆるものごとはしかるべくなるものなり」

この「罪」というあからさまな言葉は、広くよくないこと全般を意味し、そしてそのお方が我々のためにこの世で背負われた恥ずかしき侮べつと完全なさげすみを、そしてそのお方の死を、そしてまたそのお方のお造りになられた者たちの霊的、肉体的な苦痛と苦難のことを、私の心に思い起こさせました。なぜならば、我々はみな多かれ少なかれ辱められているのであり、我々の主人、イエスの例にならって、我々が完全に清められるまで辱められ続けるものなのです。つまり、罪深き肉と、あまりよろしくはない内なる感情のすべてから我々が自由になるまでは、です。そしてまたこれを見つめ、これまでの痛みと、これからやってくるであろう痛みとを思いながら、そしてまたこれらのことによって、私はキリストの受難とは、最大、無比の苦痛である、ということを理解しました。そしてこのことすべては、ほんのわずかに示されただけに過ぎず、すぐに心地よきものに取り替わられました。なぜなら、我らがよき主は魂がこの恐ろしい光景に恐れをなすことをお望みにはならなかったからです。

ですが、私は罪を目にすることはありませんでした。というのも、罪とは、何らかの実体をもったものでも、何らかの存在でもなく、その原因である痛みによってのみ知られるものだ、と私は考えるからです。ですので、痛みとは私にとって、一時的なものなのです。なぜなら、それは我々を清くし、自らを悟らせ、慈悲を請わしむるものであるからです。というのも、我らが主の受難は、我々みなにとってこのことすべてに対する慰めであり、主のありがたきご意思もまたそうなのです。そして、救われるべき者すべてに対して、我らがよき主が持っているやさしき愛のゆえに、主は喜んでやさしく慰めてくださいます。そのお心のうちは、「すべてのこの痛みの源が罪である、というのは正しい。だが、万事はしかるべく、万事はしかるべく、そう、すべての物事はしかるべくいくものなり」このお言葉はとてもやさしく語られ、私や救われるべき者のうちの誰かに、何かの罪を問うというようなご様子はみじんの欠けらも見られませんでした。もしそうであったのなら、私の罪を神になすり付けたり、自らの罪故に神に当惑したりする恐れ多い行いをしてしまうことになりましょう。というのも、神は罪のために私を責めたりなさってはいないのですから。

そして私はこの同じお言葉の中に、神のうちに隠されている優れた、驚嘆すべき特質を認めました。その特質は、神が天国で我々に包み隠さずにお示しくださいます。このようにして知ることによって、神が罪が生ずるのをお許しになったのはなぜか、その原因をはっきりと理解することができるようになります。その光景を目にし、我々は永遠に我々の主である神をたたえることとなるのです。

救われるべき神の子たちが苦しみにうち震え、キリストが哀れみをもってうち喜ぶ、とはいかなることか。また、苦難に対する救済について——28章。

このように、罪ゆえに、キリストが我々に対してどんなに哀れみの心を持っておられるか、を私は理解しました。そして、以前に私がキリストの受難を目にした際に、苦痛と哀れみで満たされたのとまったく同じように、このとき私は同胞のキリスト者たちへの哀れみでいくらか満たされました。あのよく、そうです、よく敬愛され救われるべき人々です。つまり、神のしもべたち、すなわち聖なる教会が、人が布切れを風の中で打ち振るように、この世の悲しみと苦悩と苦痛のうちにうち震えることとなるのです。そしてこのことに関して、我らが主はこのようにお答えになりました。「これにつき、我は大いなるものを天国に造らん。果てなき誉れと永遠の喜びとなるものを」

そうです、主がご自分の恵みの中へお連れになることを切望している人々、ひとりびとりの苦難を、我らが主は哀れみと同情とをもってお喜びになられることを、私は理解したのですが、主はひとりびとりのしもべたちに、主の目にはまったく悪ではないものを背負わせるのです。しもべたちはそれが故に、この世でなじられ、そしられ、嘲笑され、縄を打たれ、追放されることになります。そして、これを主がなさるのは、しもべたちをこの世の汚らわしい高慢と虚栄の害悪から守り、天国への道を進む準備を整えさせ、終りなく永遠に続く主の恵みのうちに、しもべたちを高めさせるためなのです。なぜなら、主はこうおっしゃっておられます。「我はそなたたちを粉微塵としよう。そなたたちのはかなき愛情と、汚れたうぬぼれが故に。して、しかる後に、我はそなたたちを造り直さん。温和で従順に、清く敬けんに。我とひとつになることによって」それから私は、愛を携えている同胞のキリスト者に対する個々人の自然な哀れみというものは、実は、ひとりびとりの中にいるキリストなのだと思悟りました。

キリストの受難の中で示されたものと同じ辱め、その辱めが再びこの哀れみの中に示され、そしてそこには我らが主のお心持ちを表す2つのものがありました。ひとつは、我々がそこであがなわれ、そこで主がたたえられるその至福。もう一方は、我々が痛みの中に見出す慰め。なぜなら、主の受難のおかげをもって万事が誉れとなり心の糧となること、そしてまた、我々が一人苦しむのではなく、主とともに苦しむということ、そして主を我々の礎として見ること、また主の痛みと恥辱は我々が耐え得ることのすべてを超えるものであり、我々がそのことを十分に考察することができない場合があるということ、主は我々に知ってほしいと望んでおられるからなのです。そして、これを凝視することによって、我々は痛みを感じる際に、不平を漏らしたり絶望したりはしなくなります。そして、我々の罪が本当にそれに値するものであると我々が考えても、主の愛は我々を許して下さいますし、主の大いなる優しさから我々の責めを取り除いて下さり、そして主は我々を無垢で憎めない子どもとして、哀れみと同情をもって受け止めてくださるのです。

29

アダムの罪は重大なものではあったが、その罪がそもそも悪であった以上に、神にとってそのしょく罪はより好ましいものであること—— 29章。

しかし、こうしているうちに、私は悲嘆にくれながら、立ったまま辺り一帯を見つめておりました。そうして、とても大きな畏れを抱きながら、心の中で次のように我らが主に申し上げました。「おお、

よき主よ。生きとし生けるものには、罪によってもたらされた大きな苦痛があるというのに、いったいどうして、すべてがしかるべくうまくいく、などということがありえましょうか」私はあえてここで、この点に関して、安心できるような、もっとはっきりとした、なんらかのお言葉が欲しかったのです。そして、これに対し、我らが至福にあふれた主は、本当に率直に、またとてもすてきな表情でお答えになり、アダムの罪はこれまでの罪のうちでも、また将来この世が終る時までの罪のうちでも、最も重いものである、とお示しになりました。そしてまた、主は、このことは地上のすべての聖なる教会においても公然と知られていることであることもお示しになりました。さらに、主は私に、輝かしきしょく罪を見つめるように、とお教えくださいました。なぜなら、このしょく罪をなすということは、アダムの罪が悪であったより以上に、神にとってより好ましいことであり、そして人の救済にとっても比類なくより一層誉れ高きものであるからなのです。

そして我々のありがたき主は、この教えにおいて次のようにおっしゃっておられ、我々に注意を喚起しておられるのです。「最大の悪を、我が正した。よって、我がそれ以下の悪をも正すであろうことを、汝が知ることが我が願いなり」

30

主の秘密のお考えを知っている振りなどせずに、いかに我らが救い主であるイエスに喜びを見出し、イエスを信ずるべきか—— 30章。

そのお方は、2つの部分からなる教えを私に授けて下さりました。そのひとつは、我々の救い主と、我々の救済についてです。このありがたい部分は、誰にでも目にできるもので、公正で陰りなく、豊かに満ちあふれているものです。というのも、よき願いを持っているすべての人と、これからよき願いを持つすべての人が、この部分に込められているからです。我々は神によってここにつながれており、内面的には聖霊によって引きつけられ、忠告と教えを受けており、外面的にはまったく同じ恵みのうちに聖なる教会によってそうなされているのです。このうちに、我々が主に喜びを見出し、専心することを、我らが主は望んでおられます。なぜなら、主は我々のうちに喜びを見出していらっしゃるのですから。そして、敬けんさと従順さをもって、このことをさらに多く受け入れれば、我々はさらに一層主の感謝に値し、さらに一層我々の励みとなるのです。ですから、我々の働きを喜んでおられるのは我らが主である、ということができましよう。

もう一方は隠れたところにあり、我々には手が届きません。つまり、我々の救済とは無縁なものごとの数々です。なぜなら、それは我らが主のひそやかなお考えであり、主がひそやかなお考えを静ひつのうちに行うということは、神のすばらしい特質なのです。そしてまた、神のしもべにとっては、恭順と畏敬の念を示すために、神のお考えを根掘り葉掘り知ろうとはしないのがふさわしいものなのです。我らが主は、我々に対し、哀れみと同情をお持ちです。なぜならその同じ生き物は、神の教えのうちに生きるのに忙しいからです。そして、どのくらい神を喜ばせればよく、どこで神を喜ばせることをやめて楽にしてよいのか、もし我々が知っていたなら、我々がそうすることを望むのは間違いありません。天上の聖人たちは、神がその方々にお示しになるもの以外のことを知る

うとはなさいません。そしてその方々の愛と願いは、我らが主のみ心次第なのです。ですから、我々もその方々のように願うべきなのです。そうすれば、我々もその方々と同じように、我らが主のみ心以外のものは何も欲しいとも、手に入れたいとも思わなくなるものなのです。なぜなら、我々はみな神のみ心においてひとつなのですから。

私はここに、何事においても、我らが救い主、喜びにあふれたイエスだけを信じ、イエスだけに喜びを見出すべきである、と教えられたのです。

31

キリストの渴望と霊的な渇きについて。それはいやされないものであり、最後の審判の日まで続くものである。また、キリストのお体であるが故に、未だすっかりと栄光に包まれきってはならず、まったく受苦不能ともなっていないこと——31章。

そしてこのように、我らが善き主は、私が持ち得る疑問や疑いにお答えになり、とてもくつろいでおっしゃいました。「我はすべてをしかるべくできる。我はすべてをしかるべくする手立てを心得ており、我はすべてをしかるべくすることを望んでおり、我はすべてをしかるべくするものなり。しこうして、汝は自らの目で、あらゆることがしかるべくなるのを見るであろう」キリストが「我はできる」とおっしゃられることは、父なる神を指しているものと思われまふ。そしてまた、「我はすべてを心得ている」という時には「子」を。さらにまた「我は欲している」という時には、聖霊を指しているものと思えます。そしてキリストが「我はするものなり」というところでは、ありがたき三位一体神の統一体を、3つの位格とひとつの真理を、指しているものと考えまふ。そしてキリストが「汝自らの目で見るであろう」とおっしゃられる時、ありがたき三一神の中で救われることとなる、すべての人類の結合を私は思い浮かべまふ。そして神は、これら5つのお言葉のうちに、安息と平安に満ち満ちて包み込まれることを望んでおられます。そしてそのようにして、キリストの霊的な渇きは終りを迎えるものなのです。なぜなら、これこそがキリストの霊的な渇きなのですから。愛への渴望、今も続き、我々が最後の審判の際にその光景を見る時までずっと続く愛への渴望こそが。

というのも、救われるべき我々、キリストの喜びと恵みとなるべき我々の中には、いまだここに至っていない者もあれば、これから来る者もあるのですから。また、その日になって初めて訪れて来る者もあることでしょう。ですから、これがキリストの渇きなのです。私が思うに、我々みなを、みなすっかり一緒に、キリストの恵みの中で、自分の内へと迎え入れることこそが。なぜかという、今の我々にはその時のキリストの中での完全さと比べると、欠けているものがあるからです。

なぜなら、我々は信仰において知っておりますし、またすべてにおいてそのように示されたのですが、救い主であられるイエスは、神でありまた人でもあらせられるからです。そしてその神性に関しては、キリスト自身が最上の恵みであり、太古からそうでありましたし、今後も無限にそうなのです。そしてその終りなき恵みは、それ自体が高くなったり低くなったりするものでは決してありません。なぜなら、このことはすべての啓示において、特に12番目の啓示において、豊かに示

されており、そこでは、「我は至高のものなり」とキリストが述べておられます。そして、キリストの人性についてですが、我々の信仰において知られておりますし、またそう示されもしましたが、キリストは神性がために、我々をキリストの恵みの中へ愛のために導かんとし、苦難と苦痛を耐え、そして死んだのです。そしてこれこそが、キリストがそこに喜びを見出すまさにその人性であって、キリストはそのことを9番目の啓示において次のように、「我が汝のために苦難を耐え忍びえたことは、我にとっての喜び、至福、そして永遠の歡喜である」と述べ、示しておられます。そしてこれがキリストのみ業の至福であり、そしてキリストは同じ啓示の中でそのことを次のように述べています。我々はキリストの恵みであり、我々はキリストの滋養であり、我々はキリストの誉れであり、我々はキリストの冠である。なぜなら、この点に関して、キリストは我々にとっての頭であり、栄光を背負い、受苦不可能なのです。そしてキリストの体については、そこにすべての仲間たちが結び合わされるわけですが、まだすっかりと栄光を帯びているわけでも、完全に受苦不可能だということでもありません。というのも、キリストが十字架の上で味わった渴望と渴きは、私が思うには、キリストの中に太古から存在し、キリストは依然として同じものを持っており、そして救われるべき最後の魂がキリストの至福の中にやって来るまで持ち続けるものなのです。

なぜなら、神に哀れみと同情という特質が備わっているのとまさに同じく、神には渴きと渴望という性質があるのです。そしてキリストが持っているこの渴望の力をお借りして、我々の方からも、キリストに対して渴望しなければなりません。なぜなら、この力をお借りしなければ、いかなる魂も天国に到達することはできないのです。そしてこの渴望と渴きという特質は、神の無限の善性から生じているもので、私が思うに、渴望と同情とは2つの異なった特質ではありますが、それはちょうど同情という特質が無限の善から発しているのと同じことなのです。そしてここに、靈的な渴きの本質があるのです。そしてそれは、キリストの至福に近づいていく際に、我々に必要がある限り、キリストの中で続いていくものなのです。そしてこのすべては、哀れみの啓示において示されました。なぜなら、それは最後の審判の日に終りを迎えるからです。

このように、キリストは我々に哀れみと同情を寄せていらっしゃる。そして我々を受け入れたいと渴望していらっしゃいます。ですがキリストの英知と愛は、最良の時が訪れるまで、終りを迎えることを許さないのです。

32

すべてがしかるようになるとは、また聖書が実現されるとは、どのようなことか。そして我々は、キリストが望まれる通り、聖なる教会の教えをしっかりと胸に刻み込まねばならないこと——32章。

ある時、我々の善き主が、「すべてはしかるようになるものなり」と、おっしゃいました。また別の折に主は、「あらゆることがしかるようになるのを汝自身目にするであろう」とおっしゃいました。この2つについて、私の魂はいろいろな解釈をしました。ひとつはこれです。主はご自分が、高貴なことや立派なことばかりでなく、小さなことや些細なこと、身近なことやとるに足らないこと、あれやこれやのことに注意をお払いになっていることを、我々に知って欲しかった、というもので

す。というのも、主が、「あらゆることがしかるようになる」とおっしゃる時には、そのようにお考えなのです。というのも、主は、最もとるに足らないものでも忘れ去られることはない、と我々の肝に銘じておいてもらいたいのです。別な解釈はこうです。我々の目には悪と映る行いがなされ、その結果ひどい害悪が生じ、よき結末にたどり着くことがまったく不可能と我々には思える場合があります。そして、我々はこれを目の当たりにし、嘆き悲しんで、結局そのために、我々が本来なすべき、神をありがたく見つめ、憩うということができなくなるのです。そしてその理由はこうです。理性の働きが曇り、とても程度が低く、粗野であるため、我々には高貴ですばらしい英知を、すなわち至福にあふれる三一神の力と善とを、知ることができないのです。よって、主は、「汝自らあらゆることがしかるようになるのを見るであろう」と述べることによって、「さあ、忠実によく聞け。汝は終末にそれをまさにまったき喜びのうちに目にするであろう」とおっしゃろうとしておられるのです。そしてこのように、「私はすべてをしかるべくできる、などなど」という5つのお言葉によって、これから訪れることになっている我らが主である神の、すべてのみ業における力強い慰めを、私は理解するのです。私の目には、至福にあふれる三位一体の神が、最後の日になさることになっているある行いがあります。そしてそのみ業がいつ行われるか、どのように行われるのか、それはキリストより下のものには分かりませんし、それがなされる時までは分からないものなのです。我々にこのことを知ってほしいと主が望む理由は、我々が一層魂の安らぎを得、愛のうちに一層憩い、主のうちに喜び、我々を真理から遠ざけてしまうかもしれないようなさまざまな魂の苦しみを見つめることをやめるようにと、主が望んでおられるからです。これは太古から、我らが主である神がお定めになった偉大なる行いです。大切に神のみ胸に隠されており、それを知るのは神のみであり、神はその行いによって、あらゆることをしかるべくあるようになさるのです。というのも、ありがたき三一神がすべてを無からお造りになられたまさにそのように、まさにその三一神はしかるべからざることのすべてを、しかるべくお整えになるのです。

私はこの幻視にとっても驚き、自分たちの信仰について、驚嘆しつつ、次のように考えました。我々の信仰は神の言葉に礎を置いており、神の言葉はすべてにおいて守られる、と信ずることが我々の信仰にとって必要なことなのだ、と。そして、我々の信仰のかなめのひとつは、大勢の者が、高慢さのために天から落ちた天使たちのように、裁きを受けるということにあります。その落ちた天使たちは、今や悪魔となっているのです。聖なる教会の教えを持たずに死する地上のひとびと、すなわち異教徒や、キリスト教を受け入れたものの非キリスト教的な生活を送って愛なく死する人たち、これらの人たちはみな、聖なる教会が信ずるようにと教えているように、永遠に地獄への裁きを受けることとなるのです。そして、これらすべてのことにも関わらず、この時に我らの主がお示しになったようにあらゆることがうまくいくというのは、私には不可能なことに思われました。そしてこの点に関して、我らが主である神の、啓示におけるお答えは、以下のようなものにほかなりませんでした。「汝には不可能なることも、我には不可能にあらず。我は、我が言葉をすべてにおいて守り、我はすべてをしかるべくするものなり」このように、私は神の恩恵によって、それまでに私が思っていたように、しっかりと信仰を持つべきだと教えられました。そして同時に、この時に我らの主がお示しになられたように、すべてはしかるべくなるものだ、と固く信ずるべきだと教えられました。なぜならば、これこそが我らの主がなさる大いなる行いであり、この行いにおいて、主はすべてにおけるお言葉をお守りになり、しかるべからざることをしかるべく正されるのです。そ

して、この時に私が神のみ心から拝察し、理解したところによると、それがどのようになされるのかは、それが行われる時まで、キリスト以下のものは知ってもおりませんし、知ることもないのです。

33

罪を負った魂はすべて、神の眼前では、悪魔として辱められる。そしてこれらの啓示は聖なる教会の教えを外れるものではなく、それを霊的に補完するものである。また、神の神秘を知ろうと画策すればするほど、我々が知ることは一層少なくなること—— 33章。

しかし、この中で、私はあえて、地獄とれん獄をあるがままに見てみたいと願いました。とはいっても、何か信仰に属するものを独り占めしようなどというつもりは毛頭ありませんでした。なぜなら、私は地獄とれん獄は聖なる教会が教えるとおりの目的のためにあると固く信じていたからです。ですので、私の心積もりでは、それを目にして私の信仰に関わる何かを学び、そうすることによって神の栄光を増し、また自分の役に立つように生きることができれば、と考えておりました。そして私の願いに関しては、悪魔が神に辱められ、永久に罪を負わされたことを以前見た、第5の啓示において述べた以外のことは、まったくなにも知ることはできませんでした。その光景を見て、この世において悪魔のような状態にあり、それで終わってしまうすべての生き物については、キリスト教の洗礼を受けていようとなかろうと、その者たちは人間であるにも関わらず、神のみ前や、神の聖なるしもべのそばにいと語られることはなく、悪魔のそばにいたことが述べられるのみだと私は理解しました。

なぜなら、啓示によって示されたのは善に関することで、その中では悪についてはほとんどなにも述べられませんが、私はそのことによって聖なる教会が私が信ずるように教えている信仰から、いかなる点においても外れることはなかったのです。といいますのも、私はさまざまな啓示においてキリストの受難の光景を目にしました。以前にお話ししましたように、はじめの章、第2章、5章、8章においてです。そこでは、私はキリストが苦しまれる姿を目にした聖母の悲しみや、キリストを本当に愛する人たちの悲しみの一端を感じることができました。ですが、キリストを死に追いやったユダヤ人たちのことがはっきりと示されていることは目にしませんでした。それはそうなのですが、恩恵によって改宗した者たちを除いて、その者たちが永遠に呪われ、重荷を負わされたことを私は信仰において承知しております。そして、いかなる点においても、そして以前に理解したあらゆることにおいても、神の慈悲と恵みを得て、信仰の中にあることを望みつつ、この生が終りを迎えるまでそこにいられるようにと、心の中で願いかつ祈りながら、私は支えられ、広く信仰を守るよう教えられたのでした。

神がなされたことに対して、我々は大いなる敬意を払うべきだというのが神のご意志ですが、我々はそれがどんな行いなのかと、思いを巡らすことをやめることが常に必要なのです。そして、神のご意志以外はまったく何も欲しない天国の聖人、我々の兄弟たちになることを望みましょう。そうすれば、我々は隠されたことについても、示されたことについても、どちらについても神を称え、満足することができるのです。なぜなら、我々が主のご意思に私は誠に読み取ったのです。我々

が主の秘密をあれやこれやのうちに知ろうとして画策すればするほど、我々はそれについて知ることから一層遠ざかってしまうものなのだ、ということ。

34

神を愛する者たちに不可欠な秘密を神がお示しになられたこと。そして聖なる教会の教えを一心に受け入れる者が、いかに大いに神を喜ばせることか—— 34 章。

我らが主である神が、2つの秘密をお示しになられました。ひとつは、この大いなる秘密であり、それに付随するさまざまな秘密の部分を持っています。そしてこれらの秘密を、神が我々にはつきりと示したいと思し召す時まで、我々には知られないでおきたい、とお考えです。もう一方は、神が白日の下にさらし、我々に知ってほしいとお考えの秘密です。なぜなら、我々がそれらの秘密を知ることが神のご意志であるということを我々が知るようにと、神が望んでおられるからです。それらはさまざまな秘密であり、神が我々に対して秘密にしておくことを望まれるものばかりではなく、我々の盲目さと無知のために我々にとっては見えないものになっているものもあるのです。そしてこのことについて、神は大きな哀れみをお持ちです。ですから、我々に分かりやすいように、神はそれらの隠されたものごとを自らお示しになることをお望みで、そうすることによって、我々は神を知り、神を愛し、神にすぎるようになれるのです。我々が知り納得すれば、役に立つことがらすべてを、すべての聖なる教会の説教や教えとともに、とてもやさしく我らの主が我々にお示し下さいます。

神は、聖なる教会の教えや説教に対して、懸命に従順に積極的に従う男や女に対しておもいの、とても大いなる喜びをお示しになりました。なぜならば、それは神の聖なる教会であるからです。神が礎であり、神が実体であり、神が教えであり、神が教師であり、神が英知であり、神こそがすべての自然な魂が追い求める報いなのです。そしてこのことは、聖霊がそれを明かすすべての魂に知られており、また知られることになるものなのです。そして、これを求めるすべての者が、それを手中にすることを望みます。なぜならその者たちが追い求めているものこそが神なのですから。

私が今申し述べたこと、そして後に私がさらに申し上げることは、罪に対して慰めとなります。なぜなら、第3の啓示において、神はなされたことすべてを行った、ということをお示ししましたが、罪というものはいかに目に入らず、かえって、すべてがしかるべくある、ということを目にしました。ですが、神が私に罪についてお示しになった時、神は、「すべてはしかるべくなるものなり」と、おっしゃられたのでした。

35

神はあらゆる善をいかに行うか。そして自らの慈悲によっていかに立派に許すか。そして慈悲は、罪がもはや許されなくなった時にみられなくなるものである—— 35 章。

そして、全能なる神がとても豊かに、あふれんばかりにその善性をお示しになられた時に、私にはひとりの愛する者がおりまして、その者が善き暮らしを守っていけるかどうか知りたいと願いました。その善き生活は、神の恵みを得て始められたものだ、と私は思っていたのでした。そしてこの私的な願いで、私は間違いを犯したようです。というも、この時は教えを受けられなかったのです。するとそれから、心の中に答えが聞こえてきました。それはまるで、親しい人が仲介の労をとってくれたかのようでした。「広く見よ。そして主なる神がそなたにお示しになる寛大さを見よ。なぜなら、何か特別のことに於いてではなく、すべてにおいて神を見つめることが、神にとって、より誉れとなることなのだから」私はこれに同意し、なにか特別なものに喜びを見出すよりも、広くあらゆるものを知ることが、神にとってより誉れになる、ということを教えられました。そして、もし私がこの教えの通りに賢く生きていきたいのならば、私はなにか特別なことに喜ぶべきでも、いかなることについても大いに気に病むこともないのです。なぜなら、「すべてはしかるべくなる」のですから。というも、まったき喜びとは、あらゆることに神を見ることなのです。なぜなら、我らがよき主は、すべてを創造されたのと同じありがたき力、同じ英知そして同じ愛によって、同じ目的に向かって、絶えずすべてを導いていらっしゃるからです。そしてそこへ、おん身自ら導かれるのです。そして時が来たれば、我々はそれを目にすることとなるのです。そして、このことの源は、第1の啓示と、そしてもっとはっきりとした形で第3の啓示において示されており、そこでは、「私は一瞬神を見た」と述べられています。

我らが主の行いは、すべて義しく、主がお許しになることは、誉れ高きことなのです。そしてこの2つに善と悪とが込められています。なぜなら、我らの主がなさることはすべて善であり、我らの主がお許しになることは、悪なのです。いかなる悪でも誉れだ、と申し上げているのではありません。私は、我らが主である神が、お許しになるということが誉れだ、と申し上げているのです。すなわちその善は、慈悲と恵みの働きによって、驚嘆すべき永遠の恭順さと慈悲のうちに知られるものなのです。義とは、とてもよきもので、それよりもよいものはないのです。なぜなら、神自身がまさに義であり、神のすべての業は、神の大いなる力と、大いなる英知と、大いなる善によって、太古から定められた通りに義しく行われています。そしてまさに、神が最善に、とお定めになったように、神は絶えずそのようにお働きになっており、その目的に向かって導いて下さっているのです。そして神は、自分自身と自らのみ業に、常に満足しておられます。そしてこのありがたき調和を目にすることは、恩恵を得てそれを目にする者にとっては、とても甘美なものなのです。

天国で永遠に救われることになるすべての魂は、神のみ前で、自分自身の善によって、義とされます。その義の中で、他のどんな生き物にもまして、我々は限りなく、立派に守られているのです。そして、慈悲は神の善から生み出される働きであり、罪が義しい魂を悩ませることを許されている限り、神の慈悲は働き続けるものなのです。そして、罪がもはや悩ますことを許されなくなると、その時になって初めて慈悲の働きは止むものなのです。そしてその時、すべてに義がもたらされ、永遠に義の中にあることとなります。そして、神のお許しにより、我々は墮落することがありますが、我々は神のありがたき愛のうちに、神の力と英知によって、守られているのです。そして慈悲と恵みによって、我々はより数多の喜びへと高められるのです。そしてこのように、義と慈悲のうちに、今や尽きることなく、神は知られ、愛されることとなるのです。そして、これを恵みのうちに看取

する者、その者はこの両者に少なからず喜びを覚え、尽きせぬ喜びを感じることとなるのです。

36

我らの主がなされるもうひとつの素晴らしき行いについて。それは恵みによってここにその一部が明かされ、そしてそのことについて我々はいかに喜ぶべきか。また神がいかに依然として奇跡を行うか—— 36 章。

我らが主である神は、ある行いがなされる時、それは神自身が執り行われる、とお示しになりました。そして、私が行うことといえば罪ばかりで、しかも我が罪は神の善き働きの邪魔にはならないものだ、とお示しになりました。そして、いつでも自然と、恵みによって神のご意志を請い願う畏れ多き魂にとっては、これを見つめることがとてもありがたき喜びだと分かりました。この行いは、ここに始められるものであり、それは神にとっては誉れとなりましょうし、この世で神を愛する者たちにとっても、とても有益なものとなりましょう。そして、私たちが天国へ参ることになった時、そのことを大いなる喜びとともに目にすることになるでしょう。そしてそれは、最後の日までそのまま働き続けるものなのです。その誉れと至福とは、天国の神と聖人たちの前で、尽きることなく続くこととなります。この行いは、我らが主のみ心でこのように見られ、考えられていたのです。そして、主がこのことをお示しになられたのは、主ご自身とあらゆる主のみ業のうちに、我々に喜びを見出させるためでした。私はこの啓示が続くのを目にし、これから訪れる大いなることのために、それが示されたのだと理解しました。それ、とは、神が自ら行う、と神がお示しになられたことです。そしてその行いには、このような前述の特質があります。そしてこれはありがたく示され、私が賢明に、信心深く、信頼して受け入れるようにと意図されたものでした。ですが、この行いとは何なのか、それは私には秘密にされていました。

そして私はここに悟ったのです。神がお示しになることを我々が畏れることを、神は望んでいらっしゃらない、と。神がお示しになるのは、我々にそれらのことを知って欲しいからです。そのように知ることによって、我々が神を愛し、神を好み、神のうちに終りなく喜びを見出すことを望んでいらっしゃるのです。そして、神が我々に対して持っている大いなる愛の故に、神は我々にこの世で誉れ高きものや有益なものをすべてお示しになります。そして、今は神が秘密にしておられることがらも、やがてひそやかに、神の偉大な善性から、それらの秘密をお示しになります。その啓示においては、我々がそれを終りなき至福のうちに目にするものであると了解し、信ずることを、神は望んでおられます。そうすることによって、お示しになられたこと、秘密にされていることのすべてに関して、我々は神のうちに喜びを見いだすべきなのです。そしてもし、我々が自ら望んで、謙虚に、そうするのであれば、そこに大きな慰めを見出すことになるのです。したがって神に尽きせぬ感謝の気持ちを持つようになるものなのです。そうして次のように、この言葉は解釈されます。すなわち、人に関してなされることは——つまりそれは広く一般の人、救われる人すべてを指しますが——それは、誉れ高く、すばらしく、あふれんばかりのものとなり、神自らがなされるものなのです。そしてそれこそが、つまり神自らがなされる行いを見つめることこそが、考える限りの最高

の喜びであり、人がなすことといえば、それは罪ばかりなのです。そうして、我らが主である神のみ心は、次のようにお考えのように思えます。「よく見よ。ここに汝の謙虚さというものがある。ここに汝の愛のことがある。ここに汝が自らを無にするということがある。ここに、汝が我のうちに楽しむということがある。そして、我が愛ゆえに、我のうちに楽しめ。なぜなら、そうすることが、すべてのうちで汝が我を最も喜ばすことあたう術なれば」我々はこの世に生を受けている限り、いつの日か我々が自らの愚かさのために罰せられた者を見つめるようになったとしても、我らが主である神は、やさしく我々に接して下さり、私たちにありがたいお声をおかけくださり、我々の心の中におっしゃられるのです。「汝の愛すべてを捨てよ、大切な我が子よ。我に向かえ。我は汝にとって足るものなり。そして汝の救い主のうちに喜び、汝の救済を喜び」そしてこれこそが、我々のうちにおける我らが主のお働きだと、私は確信しております。恩ちょうを得て、このことを知った魂は、これを目にし、また感ずるのです。そして、この行いは広くみなのためと考えるのが正しいのですが、特定の人たちを除外するものではありません。なぜならば、我々の善き主が哀れな人間になさることは、現時点では人間には分かりません。ですが、この行いと、以前に申し上げたものとは同じものではなく、2つの異なったものです。そうではありますが、こちらはまもなくなされます。そしてそれは我々が天へ昇る時なのです。我らの主がそれを誰にお与えになるか、それは今でも少しは知ることができます。ですが、先に申し上げたその大いなる行いは、地上においても天国においても、それがなされるまでは知ることができないものなのです。

さらに主は、奇跡の働きを、次のように、特別に解釈し教えて下さいました。「以前地上で、あまたに幾度も、高貴にすばらしく、誉れ高く立派に、我が奇跡を行ったことは知られておろう。まさに我が以前なしたように、今も依然として我は行っており、今後も行うものなり」奇跡の前には、悲しみと苦悩と苦しい試練がやってくるということが知られています。そしてそれは、自らをむなしくし、神を畏れることと、助けと恵みを大声で請い求めることによって、我々が自らの弱さを知り、罪を犯すことによって陥る自らの邪悪さを知ることなのです。その後になって、奇跡が訪れます。そしてそれは、神の気高き力と英知と善とからなっており、神の徳と、はかないこの世において可能な限りの天上の喜びとを示すでしょう。そしてそれは、愛のうちに、我々の信仰を強くし、希望を膨らませるためのものなのです。ですので、奇跡を通じて知られ、奉られることを、神はお喜びになります。そして、神は、次のようなお心持ちなのです。襲い来る悲しみや風雪によって、我々があまりに打ちひしげられないようにと、神は望んでおられます。なぜならば、奇跡が到来する以前は、ずっとそうであったのですから。

37

神は、選ばれし者を、たとえその者たちが罪を犯しても、少しも揺るぎなくお守りになる。なぜなら、この者たちは決して意識的に罪を犯そうとはしない、恐れ多き心を持っているから—— 37章。

私は罪を犯すものである、ということを神は思い起こさせて下さいましたが、神を見つめることがただただうれしくて、私はその啓示によくよく注意を払うということを怠っておりました。する

と我らが主は、慈悲深くお待ちくださり、集中するようにと私に恵みを与えて下さいました。そして私は、この啓示が私のためだけの特別なものと解しましたが、今お分かりになるように、この後に続くさまざまな恵み深き慰めによって、それは、すべての同胞のキリスト者のためのもの、すべてはみなのためであり、特定の人に限られたものは何もない、と私は教えられました。我らが主は、私が罪を犯すものであるとお示しになりましたが、ひとりの私というものに、すべての人が込められているのです。そして私はこのことに、敬けんな畏れを感じました。そしてこれに、我らが主がお答えになりました。「我は汝を大いにしっかりと守らん」このお言葉は、私が計り知ることが到底できないほど多くの愛と安どと、そして霊的な養いをもって語られました。それというのも、自分が罪を犯すものだということが示されるのと時を同じくして、慰めが示されたのですから。すなわち、すべての同胞のキリスト者への、安どと養いとが。神が救われるべきものすべてを、あたかもひとつの魂のように愛していらっしゃるということを、神のうちに目にする以上に、私を同胞のキリスト者への愛へと向かわせるものが外にありますでしょうか。なぜなら、救われるべき魂はみな、わざと罪に陥ることはなかったし、これからも罪には陥らない、という信心深い意思を持っているからです。まさしく、低きところに、善きことなどまったく望まない獣のような意思があるのと同じように、高きところに、畏れ多き心があり、それはとても善きもので、決して悪を望むことはなく、常に善を望んでいるのです。ですから、我々は神が愛して下さいるものであり、終りなく我々は神のみ心にかなうことをなすのです。そして、我らが主は、このことをまったき愛のうちにお示しになり、我々は神のみ前でそのまったき愛のうちにあります。そうです。我らが主は今、こちらにいる我々を、あちら側で我々がご尊顔を拝している時と同じく、よく愛して下さいるのです。しかし、お分かりのように、我々の側に愛が足りないことこそが、我々のすべての苦しみの源なのです。

38

選ばれしものの罪は、喜びと誉れに帰されるものであること。ダビデ、ペテロ、そしてベバリーのヨハネの例—— 38章。

また神は、罪は恥になるどころではなく、人にとっては誉れだ、とお示しになりました。なぜなら、あらゆる罪に対し、神の正義によって苦痛が報いられるように、あらゆる罪に対し、同じ魂に、愛によって至福が与えられるからです。さまざまな罪が、その罪の重さに応じて、さまざまな苦痛によって罰せられるように、それらの罪は、魂にとってのこの世での苦痛と悲しみの度合いに応じて、天上ではさまざまな喜びとなって報われるものなのです。というのも、天上へとやって来る魂は、神にとって貴重であり、またその場所は大変に誉れ高きものであって、神の善は、やがて天国へやって来る魂が、その罪が報われることなしには、罪を犯すことをお許しになりません。そしてこのことは永遠に知られるところとなり、あふれんばかりの誉れでありがたく回復されることとなるのです。というのも、この光景に、私の理性は天上へと引き上げられました。すると神は樂しげに、ダビデや、旧約に書かれている外の方たちを無数に、私の心にもたらししました。そして新

約については、まずマグダラのマリア、ペテロとパウロ、そしてインドの人々、それからベバリーの聖ヨハネ、そしてまた、外の方たちを数えきれないくらい、私の心にお示しになりました。そういった罪を持った人々は、地上の教会では、どのように知られているのでしょうか。罪は負ってはいないが、恥とはならならず、すべてが誉れとなる人々は。そして、我々が優しき主は、その人々のために、あの世では完全なものを、この世で少しお示しになりました。なぜなら、あちらでは罪の印は誉れに変えられるものだからです。

そして、ベバリーの聖ヨハネを、親しみやすさが我々の慰めになるようにと、我々が主はそのお方をとても高らかにお示しになりました。そして、いかにすばらし隣人であり知古であるか、思い出させて下さいました。そして神は、我々が呼ぶように、単にベバリーの聖ヨハネとお呼びになりました。そしてそれを、喜色満面のお優しいお顔でなさり、神の目にはその方が天においてかなり高位の聖人であって、祝福された者であることをお示しになりました。そしてこれといっしょに、ヨハネが若く幼い頃には、とても神を愛し、とても神を畏れる、立派な神のしもべであったことを神はお述べになりました。ですが、それにも関わらず、神はヨハネが墮落することを許したのです。ヨハネが死んだり、時を無駄に過ごしたりしないようにとヨハネを慈悲深く見守りながら。そして後に、神はヨハネを数層倍の恵みへと引き上げ、そして、ヨハネが日々の暮らしで身に付けた痛悔と謙虚さにのために、神は天において、墮落しなかった場合の数層倍もの喜びをヨハネに与えたのです。そしてこれが正しいことであることを、地上においてご自分の身の回りで数々の奇跡を絶えず起し、神は示されたのです。そしてこのすべては、我々を愛のうちに喜ばせ、快活にさせるためのものだったのです。

39

罪の痛みの鋭さと、痛悔の善きこと。そして我々がしばしば墮落することを嘆かぬよう、我らの優しき主がいかに望んでおられるか—— 39章。

選ばれし魂が打ち据えられるなかでも、罪が最も厳しいむち打ちなのです。そのむち打ちは、男や女をみな厳しく打ち据えるため、自らの姿を見るのにも嫌気がさし、やがて自分は生きるに値せず、地獄へ墮ちるのだと感じ、そうしているうちに、聖霊に触発された痛悔が訪れ、苦々しさを神の慈悲を求める望みへと変えてくれるものなのです。そしてその者は傷を治し、魂を蘇らせ始め、聖なる教会の暮らしへと向かうのです。美しき神のお姿を汚したことを大いに嘆き大いに恥じながら、自らの意思で、包み隠さず、偽りなく自分の罪を明かすようにと、聖霊がその者を悔い改めへと導くのです。そうして、その者はあらゆる罪に対し、審判者が下した許しを得ることになります。このことは、聖霊の教えにより、聖なる教会の礎となっています。そしてこのことは、神がたいそうお喜びになる謙虚さのひとつなのです。外には、神が与えて下さる肉体的な病、そして外部からもたらされる苦しみや恥、そしてまた、肉体的、霊的に投げつけられる、さまざまな苦しみや誘惑を伴った非難や侮蔑、があります。

自らの罪のため、またそうなるのが当然なるがゆえに、我々がほとんど見捨てられ、打ち捨てら

れてしまったと思える時に、我らが主はとても大切に我々を守っていて下さいます。そして、我々がここまでとり着くことができた謙虚さゆえに、神の眼前で、神の恵みにより、大変な痛悔と、また同情と、そして神への切なる願いをもって、我々はとても高く引き上げられることとなります。すると、その者たちは罪と痛みから解き放たれ、至福を与えられ、また立派な聖人に取り立てられさえるのです。痛悔によって我々は清められ、同情によって準備を整えられ、そして神への切なる望みによって我々は誉れ高く取り立てられるのです。この3つの方法が、私の理解するところでは、すべての魂が天国へと到達する術なのです。それはつまり、地上では罪人であって、そうして救われることになる者たちの術です。なぜなら、このような救いの薬による方法が、すべての魂の救済に似つかわしいやり方なのです。その者はいやされても、神のおん前では傷は見えます。傷としてではなく、誉れとして。

そしてまた逆の場合、この世で苦しみや罰によって罰せられたのならば、我らが主である全能の神のありがたき愛によって、天上で報いられることになるのです。神は、そこへやって来るもの誰しもが苦勞したものを、いかほどであろうとも失うことを望んではおられないのですから。なぜなら、神は自らを愛してくれる者たちを苦しませたり、苦痛を味あわせたりすることは罪であるとお考えで、神は、愛ゆえに、その者たちに責めを負わせないのです。我々の受け取る報いは、決して小さなものではなく、気高く、栄光に満ち、誉れ高いものです。そしてこのように、恥は誉れに、さらなる喜びへと変えられます。なぜなら、我々のありがたき主は、何度も経験する墮落や、甚だしい墮落のゆえにしもべが嘆き悲しむことを欲してはおられないからです。というのも、我々の墮落は、神が我々を愛する妨げとなるものではないのですから。

平安と愛とは、常に我々のうちにあり、うちにあって働いています。ですが我々は、常に平安のうちにあり、愛のうちにあるというわけではありません。とはいえ、神は我々が以下のことに注意を払うようにと望んでおられます。すなわち、神が愛におけるすべての命の礎であること。そして、神が我々の永遠の守り手であり、ひどく厳しく我々に迫り来る邪悪な敵から、力強く我々を守って下さっていること。そしてこのように、我々の必要性はより一層大きなものなのです。なぜなら我々が自らの墮落によって神に機会をお作り申し上げるのですから。

40

我々には、愛のために罪を慎みながら、イエスの愛を求めることが必要であること。罪の邪悪さはすべての痛みをしのぐこと。そして我々が罪を犯している時でさえも、神はとてもやさしく我々を愛して下さっていること。そして我々も隣人に対してそうすべきであること—— 40 章。

これこそが、我々が罪を犯している時でさえも、とてもやさしく我々をお守り下さる、我々がありがたき主の至高の好意なのです。そしてさらに、そのお方は、我々にとてもひそやかに触れになり、慈悲と恵みのありがたき明かりで照らし、我々の罪をお示しになります。ですが、我々が自分自身がとても汚れているのを目にすると、その時、自分たちの罪のために神がお怒りだ、と我々は考えます。そうすると、我々は聖霊によって触発され、悔悟によって、神の怒りを鎮めるために、

魂に安息を見出し、良心が休まる時まで、全力で我々の暮らしを改善したいと願い、祈るようになります。そのような時には、我々は神が我々の罪をお許しになっていることを望みます。そして、それは正しいのです。するとその時、我々のありがたき主が、魂にお姿をお見せ下さいます。とても楽しげに、喜色にあふれたお顔で、親しげに迎えて下さりながらも、まるで苦痛にさいなまれながら、それまではさながら牢獄におられたかのようなご様子です。そしてやさしくお言葉をかけて下さいます。「いとおしきものよ。よく来られた。うれしいぞ。汝のすべての苦しみに我はずっとともにあり、今や汝は我が愛を目にし、我々は至福のうちにひとつとなったのである」このように、慈悲と恵みによって罪が許され、恵みにあふれた聖霊のお働きと、キリストの受難のおかげをもって、魂がしばしば天国へとやって来る時にあるべきように、我々の魂は喜びのうちに誉れ高く受け入れられます。

ここに、すべてのことは神の偉大な善性によって整えられており、我々が平安と愛のうちにある限り、我々は本当に安心であると、私は誠に理解します。ですが、我々がこの世に暮らす限り、このような完全な状態になることは難しいので、すばらしき祈りを捧げながら、我らが主・イエスとひとつになりたいという愛にあふれた願いのうちに暮らすことが、常に我々にはふさわしいのです。なぜなら主は、主の霊的な渇きが示された際に申し上げたように、常に我々をまったき喜びへとお導きになることを望んでおられるのです。

さてそこですが、先程申し上げたこのあらゆる霊的な慰めは、もし、愚かさにそそのかされ、いかなる男や女でも、「もしこれが真実なら、もっとご褒美をもらうために、罪を犯した方がいいんだ」とか、罪を犯すことをそんなに恐れなくてもよいのだ、と考えるのなら、この手のそそのかしに注意なさい。なぜなら、本当にそのようなものがやってくるのなら、それは偽りであり、それはこの慰めのすべてを我々に教えて下さる真実の愛に対する敵からのものです。その同じありがたき愛は、愛のためだけに罪を憎むようにと我々に教えて下さいます。そして私は、私自身の感覚から、確信しています。自然な魂のおのおのが、我らが主である神のありがたき愛の中にこのことを見れば見るほど、より罪を憎むようになり、より罪を恥じるようになるものなのです。なぜなら、我々の面前に、地獄とれん獄と地上との、ありとあらゆる苦痛や、死や外のもの、そして罪が並べられたとしたら、我々は罪をではなく、あらゆる苦痛を選択すべきなのです。というのも、罪というものはとても邪悪で、忌み嫌われるべきもので、苦痛とは比ぶべきものではないのです。そしてその苦痛とは、罪ではないのです。また私には、罪よりもきびしい地獄は示されませんでした。なぜなら、自然な魂は地獄ではなく、罪をもっているものだからです。

そして我々が愛と謙虚さに専心すると、慈悲と恵みの働きによって、我々はすっかり汚れなく清められるのです。そして、神が人を救済するために、強大で英知に富んでいるように、神は人を救うことを望んでいらっしゃるのです。なぜなら、キリスト自身がキリスト教徒のあらゆる定め礎であり、悪に対して善を行うようにとお教え下さったのです。ここに我々は、キリスト自身こそがこの愛である、ということを見て取れますし、キリストは我々にお教えになるように自ら身を処していらっしゃいます。なぜなら、そのお方は、自分自身と同胞のキリスト教徒に対して、我々が終りなきまったき愛のうちに、そのお方のようなことを欲しておられるからなのです。我々の罪によって、そのお方の愛が途絶えるということがないように、我々自身に対してと同胞のキリスト教徒たちに対して、我々の愛が途絶えることをそのお方は望んでおられません。ただただ、容赦

なく罪を嫌い、神が魂を愛するように、我々が魂を愛することを望んでおられるのです。そうすれば、神が罪を嫌うように、我々も罪を嫌うようになり、神が魂を愛するように、我々も魂を愛するようになるのです。そうして、神がおっしゃられた次の言葉が、尽きせぬ慰めとなるのです。「我、汝をしかと守れり」

41

14番目の啓示は、以前に申し述べたことなど。慈悲を請い求めて祈り、それが与えられないことはあり得ない。そして、我々がどんなに渴き、恵まれなくとも、いかに神は我々が常に祈ることを望んでおられるか。なぜなら、そういった祈りは、神にとって望ましく、心地よきものであるから——41章。

この後、我々が主は祈りについてお示し下さいました。その啓示の中に私は我々が主のみ心の2つの前提を見ます。ひとつが義であり、もうひとつが揺るぎなき信頼です。ですが、それにも関わらず、しばしば我々の信頼が十分ではないことがあります。なぜかという、神が我々の祈りに耳を傾けて下さっているのかどうか、自信が持てないことが我々にはあるからなのです。というのも、我々はとるに足らぬ者で、おまけにまったく何も感じとれないように思われるからです。なんとなれば、我々は往々にして、祈りの後でも、祈りの前と同じく、恵まれず、渴いていることがあるからです。そして、我々の感じるどころでは、この我々の愚かさが、弱さの源なのです。というのも、私はそのように自分自身感じていたからです。そして、こういったことがらを、我々が主は突然私に思い起こさせ、これらのお言葉をお示しになりました。「我が汝の祈りの礎なり。まず、汝がそれを手にせんことを、我が願う。して次に、我は汝にそれを欲さしむ。してその後、我は汝をしてそれを祈らせる。して、汝はそれを得んと祈る。さて、汝の祈りがかなわぬなどということが、いかにして起こりえようか」そしてこのように第1の理由で、後に続く3つとともに、我々がよき主は、まさにその同じお言葉に見られるように、力強い慰めをお示しになっておられます。そして、主は第1の理由として、次のようにおっしゃっておられます。「して、汝はそれを得んと祈る」と。そこで主は、我々の祈りに対してお与え下さる、とても大きな喜びと、尽きることのない報いをお示しになっているのです。そして6番目の理由として、主はそこで、「さて、いかにして、云々」とおっしゃりますが、これはそのようなことなどあり得ない、ということなのです。というのも、我々が慈悲と恵みを求めて祈り、それを手にすることができないなどということは、まったくあり得ないことだからです。なんとなれば、我々がよき主が我々に祈らせるものは、始源から、主自らが我々に対してお定めになったことだからです。ここに我々は、我々の祈りというものが神の善性のもとになっているものではない、ということを見て取ることができるでしょう。そしてこのことを、主は、「我が礎なり」とおっしゃる際に、誠にそれらのありがたきお言葉でお示しになりましたのです。そして我々が善き主は、主を愛するこの世の者たちに、このことが知れ渡ることを望んでおられます。そして、我々が知れば知るほど、もしそれが賢明に理解されていれば、それだけ一層我々は祈るようになるものなのです。そして、それが我々が主のみ心なのです。祈りとは、聖霊のありがた

くひそやかな働きによって、新たで、恵み深く永続する魂の望みが、我らが主の望みとひとつに合わされ、結びつけられたものなのです。我らの主が、私の目には、我々の祈りを最初に受け取られる方です。そして主は、とても感謝にあふれ、喜びにあふれてその祈りを受け取ります。そして主は、その祈りを上へ、天上へと送り、決して祈りが朽ち果てることがない宝物殿に供えます。そこで、神のみ前で、神性にあふれた中で、祈りは常に受け入れられ、絶えることなく我々の願いは成就せられるのです。そして、我々が至福を手にするとき、我々の願いは、神の尽きることなきありがたき感謝とともに、喜びの度合いに応じて、我々に与えられることとなるのです。

我らが主は、我々の祈りをとてもお喜びになり、とても楽しげにしておられます。そして、主は祈りをささげられることを楽しみにしておられ、望んでおられます。というのも、主は恵みによって、我々を、主ご自身のように、我々が本来あるべき姿にしてください。そしてそれが、主のありがたきご意思なのです。なぜなら、主はおっしゃいます。「うちなる祈りをささげよ。あらたかなものが感じられなくとも。なんとなれば、汝が何も感ずることなくとも、汝が何も目にする事なくとも、汝には何も分からないと思えたとしても、そうすることは有益な故に。なぜならば、渴き、恵まれず、病を得て弱っている折、そのような折こそ、汝の祈りは我にはなほだ心地よきものなれば。汝にはその効能のほどがほんの少ししか分からなかったにしても。かようにして、汝の切なる祈りはすべて我が目にするところなり」主が我々に下さる、報いと尽きせぬ感謝のため、主のご面前で我々に絶えず祈らせることに、主は執着しておられます。我々がどのように感じようとも、神は、しもべの善き願いと労苦とを受け入れられます。ですから、我々が働くことを神はお喜びになられるのです。そして、我々の祈りにおいて、そして神の助力と恵みを受けての善き暮らしにおいて、妥当な分別をもって神に対して我々の力を集めるのです。まったき喜びのうちに我々が求めるお方、すなわちイエスを、我々が手中にする時まで。神はそれをお喜びになられます。そして、神はそのことを、ずっと先のことにはなりますが、15番目の啓示の中で、次の言葉で示しておられます。「汝は我を報いとして得るものなり」

そしてまた、感謝は祈りの一部なのです。感謝とは、新に、内的に知ることなのです。大いなる謙遜と、すばらしい畏れをもって、全身全霊をもって我々のよき主が我々を向かわせる働きに打ち込みながら、内的に喜び、感謝することなのです。そして時に、あふれんばかりになり、声とともにあふれ出し、言葉となります。「善き主よ、ありがとうございます。あなた様が祝福されますように」そして時に、心が渴き何も感じなくなったり、あるいは我々の敵からの誘惑を受けた時、理性と恵みに駆り立てられ、声を大にして我らが主の名を呼ぶのです。主の受難と、主の大いなる善を思い起こしながら。そして、我らが主のみ言葉の力が、魂の中に入り込み、心に力をみなぎらせ、恩恵によって本来の働きを取り戻させ、我らが主をたたえるために、魂をして、とても熱心に、本心から祈らせます。これこそが、とてもすばらしい感謝であると、神の目に映るものなのです。

祈りまつわる3つのことについて。そして我々はいかに祈るべきか。また、我々がなすべきことに取り組む際に、我々の不完全さや弱さを常に補ってくださる神の善について——42章。

我々の主なる神は、我々が真の理解に達することを望んでおられます。それはつまり、我々の祈りにまつわる3つのことがらについてです。まず第1は、誰から、どのようにして我らの祈りが生ずるか、です。誰から、については、神が「我が礎なり」とおっしゃる際に示されています。どのように、については、神の善によって示されています。なぜなら、神は「第1に我が願う」とおっしゃっておられるからです。第2には、我々はどのようなやり方で、いかに我々の祈りを用いるべきか、です。そしてそれは、我々の望みが、喜々として、我らが主の望みに向けられることです。そして神は、「我は汝にそれを欲さしむ」とおっしゃる際に、そのように望んでおられます。第3に、我々が、自らの祈りの収穫と目的とを承知していることです。それはすなわち、なにごとにおいても、我らが主とひとつになり、主のようになることです。そしてこれを意図し、これを目的として、このありがたい教えが示されたのです。そして、主は我々を助力せんことを望んでおられ、主ご自身がおっしゃられるように、我々が主のようにならんことを望んでおられます。主が祝せられますように。

なぜならば、我々の祈りと我々の信頼とが等しく大きなものであること、それが我々が主のご意思だからです。それは、もし我々が強く祈るのと同じように、深い信頼をもっていなければ、たとえ祈っても我々が主にとって十分な誉れとはなりませんし、また我々は行きどころなく、自らを苦しめることとなります。私が思うに、その理由はこうです。我らの祈りがよって立つお方が、我々の主である、ということを我々が本当には理解してはいないということなのです。また、主の愛からの恵みによってそれが我々に与えられるものだ、ということ我々は理解していないことになるのです。なぜなら、もし我々がこのことを知っていれば、我々が望むものすべてを、我らが主からの賜り物として手にするのだ、と信ずることができるでしょう。なぜなら、もし、慈悲と恵みが最初に与えられているのであれば、誰も本心から慈悲と恵みを請うことがないのは確実だ、と私は考えるからです。しかし時に、長く祈ったのに、それでも願いがかなえられていない、と我々には思えることがあるものです。それでも、落胆することはありません。なぜなら、我らが主のみ心によって、我々はいよいよ時期か、さらなる恵みか、あるいはよりよい賜り物を待ち受けていることになるのですから。主は、我々が、主自身を本当に理解することを望んでおられます。主は存在されるお方である、と。そしてこれを知ることによって、我々の理解が、我々のすべての力、すべての意思、そしてあらん限りの心によって立つことを、主はお望みなのです。そしてこの基礎の上に、我々が自らの宿り、住まいを築くことを、主は望んでおられるのです。

そして、主ご自身のありがたい光によって、主は我々が次のことを理解することを望んでおられます。まず第1に、我々が気高くすばらしく造られていること。第2に、ありがたく誉れに満ちた我々のあがない。第3に、主が我々の役に立つようにと我々の下にお造りになったものすべてと、そして愛のために、それを主が養っておられること。そして、主はあたかも次のようにおっしゃっておられるかのようです。「よいか、我は汝が祈り以前に、すべてをなした。そして今となりて汝があり、我に祈りおる」したがって、主はこのようにお考えなのです。聖なる教会が説いているように、もっとも偉大なる行いは済まされた、と我々が知るべきであると。そして我々はこれを見つめ、感謝しつつ、今行われつつあるみ業に対して祈るべきなのです。それはつまり、主が我々をお統べになられ、我々をこの世における主の誉れへとお導きたまい、主の恵みへと我々をお導きたまわんことを、と。ですから、主は、すでに、すべてをお済ませなのです。

そして、主は次のようにお考えです。主がそうなされることを我々が目にし、我々がそれを求め、

祈るべきだと。なぜなら、祈りだけでは十分ではないのです。というのも、もし祈るだけで、主がそれをなさるのを我々が目にしないのであれば、我々の心は陰り、疑い深くなります。それは主の誉れとはなりません。そしてもし、主がなしたまうことを我々が目にするのみで、祈らないのであれば、我々は務めを果たしてはおりません。そして、そうであってはいけないのです。つまり、主のお考えでは、そうではないのです。ですから、主がなしたまうことを目にし、それを求めて祈ること、そうすることで、主はたたえられ、我々の祈りがかなうのです。いかなるものであれ、我々が主がなしたまうと定められたこと、広く一般的なことであろうと、なにか個別的なことであろうと、我々がそれを求めて祈る、ということが主のご意思なのです。そして、私が思うに、それは主にとってのお喜びと至福であり、我々がそれゆえに手にする感謝と誉れ、それは生きとし生けるものの理解を超えたものとなるのです。なぜなら、祈りとは、善き願いとゆるぎなき信頼を持っているれば今後訪れることとなる、まったく喜びに対する正しき理解のことなのです。我々が自然に定められている至福に事欠くと、我々はそれを求めます。我々の救い主に対し好ましい心で接する時、正しい理解と愛が、ありがたく我々に信ずることを教えてくれます。そして、これら2つの働きのうちに、我々が主は、我々を絶え間なく見つめておられます。なぜなら、それが我々の責務であり、我々に対し主の善性がそれ以下のものをお求めになることは考えられないのです。ですから、我々は自らの義務を果たすことが望ましいのです。そして我々がそれをなし終えたとき、我々にはそれが無だと思えることでしょう。そして、それは正しいのです。しかし、我々ができる限りのことをなし、本気で慈悲と恵みを求めると、我々に欠けているものはみな、主のうちに見出すことができるものなのです。そしてそれこそ、主が「我が汝の祈りの礎である」という際の、み心なのです。

そしてこの喜びにあふれたお言葉のうちに、啓示とともに、我々のありとあらゆる弱さ、我々のさい疑心にあふれた恐れが、完全に克服されるのを見たのです。

43

神のみ心にかなう祈りは何をなすか。また、あたかも我々から常に目をお離しにならないかのように、なにごとにおいてもとてもすばらしくお働きになる神の善は、神が我々のためになされる行いにいかに大きな喜びを見出すか—— 43章。

祈りは、魂を神とひとつにします。なぜならば恩ちょうによって回復された魂は、その本来の性質や実質において、神にとっても似ているものなのですが、人間の側の罪によって、さまざまの点で神とは異なった性質のものになってしまっているからです。ですから祈りは、神がお望みになるように魂が望んでいる、というあかしとなり、良心を慰め、人が恵みを手にしやすくします。ですので、神は我々に、祈るようにとお教えになります。そして、我々が恵みを手にすることを強く信ずるよう、とお教えになります。なぜなら、神は愛のうちに我々を見守って下さっており、我々を善き行いの伴侶になさろうとしておられ、ですから、神のなさりたいことを願う求めるようにと、神は我々を掻き立てます。贈り物として受け取ることを神が望まれる、そのような祈りと善意に対して、神は我々に報いることを望まれ、尽きることのない報いを下さいます。そしてこのことは、次の言

業に示されました。「そして汝はそれを請う」この言葉で、神はとても大きな喜びと、とてもおきな楽しみをお示しになりました。それはまるで、神が我々が行う個々の善き行いをいちいちご覧になっているかのように——ですが、善き行いをなすのは神なのですが——そして、それが故に我々は神のお気に召すいかなることでもなそうと、神を強く求めるのです。それはあたかも神が次のようにおっしゃっているかのようなのです。「では、我をより以上に喜ばせるものがあるか。強く、賢明に、思いを込めて、我がなさんと欲すことをなすことを欲するよりも」そしてこのようにして、祈りを通じて、魂は神とひとつになるのです。

しかし、我々の立派な主が、恵みによってお姿を我々の魂にお示しになれる時、我々は、我々が望むものを手にすることになります。そしてその時には、我々はしばし祈る当てを見失い、あらん限りの力を込めた我々の目的のすべてが、ただひたすらに神を見つめることに定められるのです。そしてこれが、私の理解によれば、気高く、目に見えない祈りなのです。なんとなれば、我々が祈るそもそもの源のすべてが、お姿を見ることがと観想することにおいてひとつになったのですから。敬けんな畏れを抱き、大いに喜び、そして、神のうちなる大いなる優しさと、神のうちなる喜びのために、神が我々をしばし揺り動かしている時でなければ、我々は何についても祈ることができません。そして、私はよくよく承知しているのですが、魂が神のお姿を目にすればするほど、神の恵みによって、魂は一層神を熱望するようになるものなのです。そして我々が神をそのように目にすることができない時、そのような時に我々は祈る必要と理由を感じるのです——欠落のためなのです——我々自身がイエスへと向かことができるようにするために。というのも、魂があらしに巻き込まれ、困惑し、かき乱されて孤立する時、そのような時こそが、神に対して自らをむなしく謙虚にするために、祈る時なのです。ですが、どのような祈りをささげようとも、それが神を、祈りをささげる人に対し好意的にさせる、ということはありません。なぜなら、神は愛において、いつでも変ることがないからです。ですから、祈る必要がある時はいつでも、我々の望みに手を貸しながら、神は我々についてきてくださるものだ、と理解しました。そして、神の特別な恵みによって、外の必要性など感ずることはまったくなく、我々が神を率直に見つめるとき、その時こそ我々は神に従い、愛によって神は我々をご自身の中へと引き入れて下さるのです。なぜなら、神のすばらしく、また豊かな善が、我々の力を満たして下さるのを見たからです。そしてそれから、あらゆるものごとにおける神の絶えざるお働きが、とてもすばらしく、英知に富み、力強くなされており、それは我々の想像を遙かに超えるもので、我々が思ったり考えたりできることを超越しているものだ、ということ私に理解しました。ですから、我々にできることは、喜びながら、神を見つめることだけなのです。神とすっかりひとつになり、神のお住まいに憩いながら、神の愛を享受し、神の善を味わう、というすばらしく、力強い願いを持ちながら。そうしてその後、神のありがたき恵みを得て、我々自身の絶えざる謙虚な祈りのうちに、素朴な我々にも理解できるようにと分け与えられた、多くのひそやかなありがたき霊的光景を見たり、感じたりしながら、我々はやがてこの生において神のみ元に到達します。そしてこのことは、すでになされたものであり、これからも、我々が愛を求めつつ死ぬ時までずっと、聖霊の恵みによってなされるものなのです。そしてその時には、我々はみな我々が主のみ前に出ます。はっきりと自分自身を自覚し、しっかりと神を見据えながら。そして、我々はみな神のうちに迎えられます。まさに神を見つめながら、しっかりと神を感じながら、霊的に神の言葉を聞きながら、神の香りをかぎながら、神をありがたく味わいながら。しかる後に、

我々は神と面と向かって顔を合わせることになります。親しく、十分に。生き物は、すなわち被造物は、神を見、終りなく神を、創造主であるお方を、見続けるでしょう。なぜならば、このように神を見てしまうと、誰もその後生き続けることができないのです。つまり、罪深いこの世においては、ですが、神が特別の恵みによって、この世でお姿をお示しになる時には、神は、生き物をそのもの自身よりも強いものにします。そして神はみ心のままに、当座役立つようにと、啓示を分け与え下さるのです。

44

三位一体神の特質について。そして人間の魂、すなわち人が、神を見、神を見つめ、神に驚嘆しながら造られた目的を行う際には、人間はいかに神と同じ特質を備えているか。そして、そのことによって、人は自分にとっては無と思えること—— 44 章。

神はすべての啓示の中で、人は休むことなく、常に意思を働かせ、永久に徳を働かせていることを、しばしばお示しになりました。そして、この働きがどのようなものであるかについては、最初の啓示において示され、それはまた驚嘆すべき背景のうちに示されました。というのもそれは、ありがたき我が聖母マリアの魂の働きに、すなわち、真実と英知のうちに示されたのです。また、どのように示されたのかについては、神の恵みを得て、見た通りにお話しできればと思っております。真実を神が語り、英知を神が見つめ、この2つから第3のものが生じます。それが、神のうちなる驚くべき聖なる喜びであり、すなわちそれは愛なのです。まさに真実と英知があるところには、実にその両者から愛が生まれ、すべては神がお造りになれるものなのです。なぜなら、神は尽きることなき至高の真実であり、尽きることなき至高の英知であり、尽きることなき至高の愛なのです。そして、それは造られたものではないのです。人の魂は神の中の生き物であり、神と同じ特質をもちますが、それは造られたものです。そして常に、造られた目的にかなう行いをします。それは神を見、神を見つめ、そして神を愛します。ですから、神は人に喜びを見出し、人は神に喜びを見出し、終りなく驚嘆することとなります。この驚きのうちに、人は神を、自らの主を、自らの造り主を、見ることとなるのです。そして、造られた自分と比べると、神はとても気高く、とても偉大で、とても善きものであるため、人にとっては自分がなんらかの値打ちを持っているものとは到底思われません。ですが、明々白々な真実と英知が、人に自らが愛のために造られたものであるということを見て取らせ、理解させるのです。そしてその中に、神は永遠に人を養っておられるのです。

45

確固として揺るぎない神の判断と、移ろいやすい人の判断について—— 45 章。

神が我々に判断を下される際には、自然に備わっている我々の本質にもとづいてなされますが、

それは常に神の中に終りなく、まったくままに損なわれることなく、ひとつに保たれているものなのです。そしてこの神のご判断というものは、神の義にもとづくものです。一方、人は変りやすい肉の感覚にもとづいて判断します。それはこの時にはこちら、またある時にはあちらと、どちら側が出るか、つまりどちらが姿を現すかによって決まります。そしてこの知恵は、こん然一体となったものなのです。なぜなら、それは時に、すぐれてやさしいもので、時にはきびしく過酷なものなのです。そして、それがすぐれてやさしいものである限り、それは義にもとづくものです。そしてそれがきびしく過酷なものである場合には、我らが善き主であるイエスが、ありがたき受難の徳を通じて、慈悲と恵みを用いてそれを正し、義しさへと導いて下さいます。そして、このようにこの2つには調和がもたらされ、ひとつになります、しかし天では永遠にそれが、その両者が、知られることとなります。

第1の判断は、神の義からのもので、神の高貴で無限なる生命からくるものです。そして、これは、神が我々には全くどんな責めも背負わせにはならないということを私が見た、あのすばらしい啓示において示された、公正ですばらしい判断なのです。そして、これはすばらしくありがたいものではありましたが、私はこれを見つめているだけでは、十分には慰められませんでした。そしてそれは、私が以前理解していた聖なる教会の教えのためで、それはいつも私の頭にあったものなのです。ですが、この教えによると、私は自分を罪人として知るということがふさわしいようで、そしてその同じ教会の教えによると、罪人は時に非難や怒りの対象となる、というのが私の理解でした。そしてこの2つを、私は神のうちには見出すことができなかつたのです。ですから、その時の私の願いは、筆舌に尽くしがたいものです。なぜなら、より気高い方の判断は、神ご自身がその時にお示しになったものですから、私がそれを受け入れるのは当然のことでした。そして、低い方の判断は、以前に聖なる教会で私に教えられたものでしたので、私はどうしても低い方の教えを捨てることはできませんでした。

ですから、私の望みは次のようなものでした。聖なる教会の伝えるこの教えは、神の目にはどのようにお映りなのか、私が真実をどのように知るべきなのか、神のうちに見たい。そしてどうすれば、神にとって誉れで、私にとっても正しいように、2つながら保つことができるのか。そして、このすべてのことについて、あとでお話しするすばしいたとえ話、ある主人とそのしもべの話、以外には、私にはどんな答えもありませんでしたが、それは鮮烈に示されたのでした。そして私は依然として望んでおりますし、私が最後を迎えるまで望んでいくものと思われませんが、恵みによって、この2つの判断を私にふさわしく理解したいのです。なぜならば、天上のものすべてと、天にふさわしい地上のものすべてが、この2つの判断に込められているからです。そして、この2つの判断について、聖霊のありがたいお導きによって、より深い理解を得れば得るほど、より一層、我々は自分自身の欠点を目にし、自分自身の欠点を知ることとなるのです。そして、そういった欠点を見れば見るほど、一層より自然と、恵みを得て、尽きることなき喜びと至福で満たされたい、と願うようになるものなのです。なぜなら、我々はそのように造られており、我々の自然に備わっている本質は、今や神のうちで至福に恵まれているのです。そして、それは造られて以来、ずっとそうでありましたし、未来永劫にわたってもそうあるものなのです。

我々は、信仰と恵みによるのでなければ、この世において自分自身を知ることはできないものであり、また自分自身を罪人として知るのでなければ、自らを知ることはできない。そして、魂にもっとも近いお方であり、それを養って下さっているお方である神が、決してお怒りになることがないのはいかにしてか—— 46 章。

しかし、この世において、我々の肉の感覚で経験する仮の暮らしでは、我々は自分自身を知ることはありません。後になって初めて、我々はまさに、鮮明に、まったき喜びのうちに、我らが主である神を知ることとなるのです。ですから、我々が至福に近づけば近づくほど、我々は一層それを請い願うようになり、そして自然に備わっている本性と、恵みとによってそうなる、というのがとても望ましいことなのです。この世の暮らしにおいても、我々の高貴な本質の絶えざる助力と力を得ていれば、自分自身について知ることができるかもしれませんが、そのように知ることにより、慈悲と恵みによってさらに一層大きく成長することができるかもしれませんが、決して我々は自分自身について究極まで知ることができないものなのです。その極みにおいて、このはかない生と、この世の痛みと苦しみが終りを迎えるのです。ですから、生まれもった本質と、恵みの助けを借りて、力の限り、終りなきまったき喜びのうちに自分自身を知ることを願い望むことは、我々にとってまさにもっともなことなのです。

ですがこの時、終始一貫、私は2つのものを思い描いておりました。ひとつは、確固たる養いとありがたい救済を伴う、永続する愛です。なぜなら、啓示はすべてこの点についてのものであったからです。もう一方は、私がそれまでに教えを受け、礎とし、用いることに努め、理解することに励んできた、聖なる教会の一般的な教えです。そして、これを観想することを、私はやめませんでした。というのも、その啓示によって、触発されてどこか別のところへ導かれていく、というようなことが、全く少しも、私には起こらなかったからです。その代わりに、教会の教えを愛し、慈しむことによって、我らが主のご助力と恵みを得て、成長し、より天上に近い知識と、より高貴な愛へと登ることができるのだ、という教えを私は受けたのです。そしてこのようにして、このことに思いを巡らせている間中、自らが罪人であることを見つめ、知ることが我々には似つかわしいく、なすべきではない数々の邪悪な行いをし、なすべき善き行いを行わずにおり、したがって、我々には苦痛と怒りがふさわしいのだ、と思われました。そしてこういったさまざまのことにも関わらず、私は実に、我らが主はこれまでもお怒りになったことはなかったし、そしてこれからもお怒りになることはない、ということを理解しました。なんとすれば、そのお方は神であり、善、命、誠、愛、平安であるのです。そのお方の愛と調和は、そのお方がお怒りになることを許さないのです。なぜなら、誠をもって、怒ることは力の特質に反するものですし、また英知の特質にも反することでもありますし、また善の特質にも反するものであることを、私は理解したのです。神は、怒ることあたわざる善なのです。なぜならそのお方は、善以外のなにもものでもないのですから。我々の魂はそのお方と結びつけられています。不変の善であられるお方です。そして神と我々の魂のあいだには、怒りも、許しも、神の目には存在しません。というのは、我々の魂は、神ご自身の善性から神と十全に一体となっており、神と人の魂とのあいだには全く何も存在することができないからです。

そして個々の啓示において、私の魂は、愛によってこの理解へと導かれ、力によって引き寄せられました。そして、我々が善き主はこのようにお示しになり、いかにして主の誠に大きな善からそのようになるかお示しになりました。そして主は、我々に知ることを願って欲しいとお考えです。それはつまり、被造物が知るのにふさわしいように、ということです。なぜならば、素朴な魂が理解したことは、神はそれが示され、知られることを望んでおいでなのです。というのも、主が秘密にされたい物事は、しっかりと賢明に、主ご自身が愛のためにお隠しになるものであるからです。私は同じ啓示の中で、あまたの秘密が隠されていることを理解しました。それは神がご自身の善から、我々がそれを目にするのにふさわしくしていただけるまで、決して明かされることのないものなのです。そしてそのことに、私はとても満足しておりますし、この高貴な驚異にみられる我々が主のご意志を、お待ち申し上げております。そして、今や私は自分自身を、我が母である聖なる教会にゆだねるものです。無垢な子がなすべきように。

47

我々はいつでも神をたたえながら、大いなる畏れをもって驚き、謙虚に苦しみに耐えなければならない。そして、我々の盲目さが、つまり我々が神を見ないことが、いかに罪の源となっていることか——47章。

我々の魂には2つの義務があります。ひとつは、我々が恭しく驚くこと。もうひとつは、我々がいつでも神をたたえながら率直に苦しむこと。なぜなら、まもなく神ご自身のうちに、我々が望むものすべてをはっきりと見ることになるということを、我々が知ることを神が望んでおいでであるからです。そしてこのすべてにも関わらず、私は神の慈悲と許しとはなんであろうかと考え、驚きを禁じ得ませんでした。なぜなら、私がそれまでに受けていた教えでは、神の慈悲とは、我々が罪を犯した後に受ける、神の怒りに対する許しである、と理解していたからです。なんとなれば、愛することが願いであり目的であるひとつの魂にとって、神の怒りはいかなる苦痛よりも厳しいものと思われまます。ですから私は神の怒りの許しは、神の慈悲のかなめのひとつだと理解していたのです。しかし、いかなる啓示においても、何を凝視してみても、何を願ってみても、私はこの点を目にすることができませんでした。

ですが、慈悲の働きについて私が理解し、目にしたことについて、神の恵みをいただいて、いささかお話ししましょう。私が思うに、この世に住まう人間というものは、移ろいやすく、弱さのため誘惑に負けて、罪を犯します。人間は弱く、己のことをよくは知らず、またその意思是曇らされてしまっています。そしてこの世で、人間はあらしにもまれ、悲しみと辛さに打ちひしがれておりますが、その原因は盲目さなのです。なぜなら、人間が神を見ないからです。というのも、もし人が絶えず神に目を向けていれば、邪悪な気持ちなど起きようはずもなく、罪へと連なるような願望を引起こされることも全くないはずなのです。この時、私はこのように目にし、感じました。そして、その光景と感覚は、我々のこの世の暮らしでの普通の感じ方と比べると、高貴で、豊穡で、恵みにあふれたものでしたが、それでも私には、魂が神を目にしたいと願うその気持ちの大きさから

考えると、小さく劣ったものだと感じられました。なぜなら、私は自分の中に、次のような5種類の働きを感じたからです。喜び、嘆き、願い、畏れ、そして確かな希望。喜びとは、すなわち、神が私に理解させて下さり、私が見たのは神ご自身であると知ったこと。嘆きとは、欠けているものを求めること。願いとは、天においてまさに明白な形で神とまみえるまでは、我々は決してまったき安息を手にすることがない、と理解し、知りながらも、もっともっと神のお姿を拝見できますように、という思い。畏れとは、その間中ずっと、その光景がこつ然と消えてしまい、自分が一人にされてしまうのではないかと感じられたこと。確かな希望とは、永遠の愛のうちにあり、私が神の慈悲のうちに養われ、神の至福に迎え入れられるものだ、と理解したこと。そして、神が慈悲深く養って下さっているという光景を目にしたよこびのため、安心し落ち着いたので、嘆きと畏れはそう大して苦痛ではありませんでした。

それでもこのすべての神の啓示の中で、このような神のお姿の様子は、この世ではずっとは続かないものなのではないか、そしてそれが神自身の誉れであり、我々の尽きせぬ喜びを増すものなのではないか、と考えました。このようなわけですから、我々は時に神のお姿を見失い、瞬時にして孤独となり、そして我々は義しさの感覚を見失います。そこには、我々のうちにあるものとは正反対のものと、いにしへの我々の初めての罪の根、およびそこから派生した我々の作ったあらゆる罪、これら以外のものはなにももなく、この世の生において我々がよく知っているように、この中で、我々はもがき、翻ろうされ、さまざまな罪と苦痛の気持ちを、霊的にまた肉的に、味わっているのです。

48

慈悲と恵みと、それらの特質について。そして我々がじっと困難を耐え忍んだ経験が、いかに喜びとなるか—— 48章。

しかし、我々が主である聖霊は、そのお方は我々の魂の中にお住まいになっている永遠の生命なのですが、まったく完全に我々を養って下さっており、我々の中で平安を作り出し、恵みを用いて平穩へと導き、神へ取りなしをし、魂を柔和にして下さいます。そしてこれが慈悲であり、我々がこの移ろいやすい世に生きている限りにおいて、常に我々が主が我々を導いて下さるやり方なのです。なぜかというと、人間の側のもを除いて、私は一切怒りというものを目にしなかったのです。そして主は、その我々のうちにあるものはお許しなのです。なぜなら、怒りは、平安と愛の対局にあるもの、正反対のものに外ならず、そしてそれは、力が足りないか、英知が足りないか、善が不足しているか、いずれかのために生ずるものです。そして善の不足は神には起こり得ず、我々の側に起こるものなのです。なんとなれば、我々は罪と惨めさのために、己の中に、平安と愛に対する惨めで絶えることなき反対物をもっているからです。そして主は、同情と哀れみの素晴らしい表情でそのことを繰り返してお示しになりました。なぜならば、慈悲の礎は愛であり、慈悲の働きというのは、我々を愛のうちに養い続けることなのです。そしてこのことは慈悲について、それがあたかも愛の中だけにあるもの、としか理解できないように示されました。すなわち、私にはそのよう

に思われたのです。

慈悲というものは、あふれんばかりの同情とひとつになった、ありがたき恵みに満ちた愛の働きです。なぜなら、慈悲は我々を養いながら働き、また、慈悲はいかなるものをも善に変えながら働くのです。愛による慈悲は、我々が少しは誤ることを許します。そして我々が誤った分だけ、我々は墮落します。そして我々が墮落しただけ、我々は死ぬのです。なぜかといえば、我々の生命である神を見失い、神を感じることがなくなるのであれば、その度合いに応じて我々が命を失うのは至極当然なことなのです。我々が誤ることは恐ろしく、我々が墮落することは恥ずかしく、我々が死ぬことは悲しいことです。ですが、この間にも、ありがたき哀れみのまなごしが我々を離れることは少しもありませんし、慈悲の働きが止むこともありません。というのも、私は慈悲の特質を観想し、また恵みの特質をも観想しました。そしてこれらのうちに、ひとつの愛における2つの働きを見て取りました。慈悲は、やさしき愛にみられる、母なる愛にふさわしい哀れみにあふれた特質をもっており、恵みは、同じ愛に見られる、威厳に満ちた君主にふさわしい誉れ高き特質を備えているのです。慈悲は働きます。養い、許し、生かし、いやし、そしてすべてはやさしき愛からくるのです。そして、恵みも働きます。高みへと引き上げ、報い、そして、我々の愛と苦勞が値するものを果てしなく包み込み、そして遠くへと広がり、驚嘆すべきやさしさのうちに、高貴であふれんばかりで神の威厳に満ちあふれた力を示します。そしてこれこそが、あふれんばかりの愛なのです。なぜならば、恵みは我々の恐ろしき過ちを、あふれんばかりで終りなき慰めに変えて下さり、恵みは我々の恥ずべき墮落を、とても誉れ高き上昇へと変えて下さり、恵みは我々の悲しき死を、神聖な至福の命として下さいます。なんとなれば、私はとてもしっかりと理解したのです。我々の反対物が、恥と悲しみが、我々を地上の苦痛で苦しめるのとまさしく同じように、まさに好対照に、恵みは天上において我々に働き、慰め、誉れ、至福をもたらして下さるのです。そして、これらのものをみな越えて、我々が天上へと昇り、恵みが我々のために用意して下さったありがたき褒美を受けるとき、我々は、苦しみに耐得るという経験を経てきたことを果てることなく喜びながら、我々が主に感謝し、我々の主を祝すこととなります。そしてそれは、我々が神のうちに知ることとなる、ありがたき愛の特質のひとつからくるものであり、我々は、それまでに苦しみを知ることなしには、決して知ることができないものなのです。

そして、私がこのすべてを理解した時、神の慈悲と許しとは、我々に対する怒りを和らげ鎮めることだ、と認めざるを得ないように思われました。

49

我々の命は、愛に基礎をおいており、それがなければ我々は消え去るのみである。しかし、神は決してお怒りにならず、我々が怒り、罪を犯す時、神は、我々の辛苦に報いつつ、慈悲深く我々を養って下さり、平安へと導き下さること——49章。

なぜかといえば、これは魂にとって高貴な驚きでした。それはすべての啓示において絶え間なく示されており、注意深く見るべきものであったのです。我々の主である神は、ご自身については、

許すということがありません。なぜならば、神は怒ることがないからです。つまりそれが不可能だということになります。というのも、次のように示されたのです。我々の生命は、すべてが愛を基礎とし、そこに根を張っています。そして、愛がなければ生きてはいけません。ですから、神の特別の恩ちょうによって、神の高貴で驚嘆すべき善をあまたに目にし、そして我々が愛において神と永遠にひとつになっていることを目にする魂にとって、神がお怒りになるということは、考えられる限り最も不可能なことなのです。なんとなれば、怒りと友愛とは、2つの相対立するものであるからです。といたしますのも、我々の怒りを鎮め、怒りをなきものにし、我々を謙虚で柔和にして下さるお方にとっては、いつでも謙虚で柔和なひとつの愛のうちにあることがふさわしいのです。それは怒りとは相反するものです。なぜならば、我らの主が姿をお見せになるところでは、平安が理解されるべきで、怒りがふさわしい場所ではないのです。なぜならば、私は神のうちにいかなる怒りも、短いものも長期にわたるものも、目にすることはなかったからです。そして本当に、私が思うには、もし神がいささかでもお怒りになることがおありでしたら、我々は決して命を授かることも、居場所をもつことも、存在することもできなかつたでしょう。なぜなら、まさに神の無限の力と、無限の英知と、無限の善によって我々が存在するように、我々を守って下さっているのは、無限の英知と無限の善における神の無限の力なのです。というのも、我々は自らの中に、邪悪さや、争う心や、敵対心を感じたにしても、それでも我々は、すっかりと神のやさしさのうちに包まれており、神の仁慈と従順さと謙虚さの中にあるのです。なぜなら、尽きることなき我々の友愛、我々の居場所、我々の生命、そして我々の存在は神のうちにあることを、私はしっかりとこの目で見たのです。というのも、我々が罪を犯す時に、我々を養って下さっている、その同じ善、そのおかげで我々は消え去らずにすんでいるのです。その同じ善が、絶えず我々を、怒りや相対する墮落へではなく、平安へといざない、本当の畏れをもって許しを得るために、我々の救済への恵みにあふれた願いを込めて、強く神を求めることが必要であることを我々に気付かせてくれるのです。というのも、我々が本当に平安と愛のうちにあるようになるまでは、我々はありがたく救われたとはいいたくないからです。なぜなら、それこそが我々の救済であるからです。

そして我々は、怒りや我々のうちにある反対物によって、我々の不明や脆弱さにふさわしく、時に苦難や、不安や苦しみに陥ることがありますが、それでも、しっかりと、神がありがたく養って下さっているのです。我々は安全であり、消え去ってしまうことはないのです。ですが、我々は、無限の喜びを得てありがたく救われた、というわけではないのです。完全に平安と愛のうちにあるようになるまでは。それはつまり、神にすっかりと満足し、神のあらゆるみ業に、そして神のすべてのご判断に満足し、また自らを愛し、自らを慈しみ、我々の同胞のキリスト者と神が愛する者みなを愛し慈しむようになることなのです。愛の名にふさわしく。そしてこのすべてを、我々のうちなる神の善が行うのです。

このように、私は、我々が労苦に直面している時に、神がまさに我々の平安であり、神が我々をしっかりと養って下さる方であり、そして神は、いつも我々を無限の平安へと導くために働いていらっしゃるのだ、ということを理解しました。そしてこのように、慈悲と恵みの働きによって、我々が謙虚で柔和に保たれている時には、我々には本当に危険がないのです。出抜けに、魂が神とひとつになります。それは魂が自ら本当に平安のうちにある時です。なぜなら、神にはまったく怒りがないからです。そしてこのように、私は、我々がまったく平安で愛のうちにある時、反対物は、あ

るいは今や我々のうちにある反対物からの障害は、まったくない、ということを理解しました。我々が主は、善性から、それが我々に役立つようにして下さっています。というのも、その反対物は、我々の苦難、そして我々のあらゆる苦しみの源なのですが、我々が主はそれらをみな取り上げ、天へと送って下さいます。そしてそこで、心に思い浮かぶよりも、また言葉に出して話すよりも、より一層ありがたく、うれしいものに変えて下さるのです。そして我々がそこへとやってくる時、これらの準備が整い、すべてがとても美しい無限の誉れとなっているのを目にすることとなるのです。このように、神は我々の確固たる地盤なのです。そして神は我々にとっての十全な至福であり、我々がそこへ参る時には、神のように我々を不変にして下さいます。

50

選ばれし者が決して神の面前で死すことがないのは、いかにしてか。そしてそのことについての驚き。また、3つのことがかの女に、神に対してそれをどのように理解したものかと、勇気をもって尋ねさせたこと——50章。

そしてこの恐ろしい生においては、慈悲と許しが我々の生きてゆく道であり、慈悲と許しが我々を恵みへと、いつでも導いているのです。我々の側であらしや悲しみに出会うと、地上における人間の判断では、時に我々は死んでしまいます。ですが、神の目には、救われるべき魂は安全であり、決して死ぬことはありませんでしたし、これからも決してありません。それでも、驚きを禁じ得ず、不思議でならず、私は魂を総動員し、次のように考えました。「善き主よ。あなた様がまさに誠であることはよく分かっておりますし、我々が日がな一日ひどく罪を犯しており、大変な罪を問われるべきこともよく承知しております。そして私は、この真理の正しさを捨て去ることもできませんし、いかなるおとがめの形跡もあなた様がお示しになられる気配はございません。どういうことなのでございましょうか」というのも、聖なる教会によくみられる教えと、私自身の感覚から、常に我々の罪の責めは我々の双肩にかけられている、最初の人間から、我々が天上に昇るまでそうだ、ということを知っていたからです。ですから、このことは驚きでした。我々が主である神は、我々にいかなる罪もお示しにならず、あたかも我々が天上の天使たちのごとく、清浄で神聖だ、と言わんばかりに思えたのですから。そしてこの対立する2者の間で、私の理性は自分の不明に苦しめられ、そして、神のありがたいお姿が私の視界から消え去り、神がどのように罪のうちに我々を見守って下さっているか分からないままになってしまうのではないかと恐れて、私は気持ちが休まることはありませんでした。というのも、私が神のうちに、罪はぬぐい去られたと理解するか、あるいは、神のうちに、神が罪をどのようにご覧になっているかを理解することが、どちらか一方はぜひとも必要なことだったのです。そうすれば、私がどのように罪を見るのが、またどのような責めを受けることになるかと理解するのが適切か、知ることができるようになるのですから。

私の願いは続きました。絶えず神を見つめながらです。ですが、私はとても恐ろしく、また混乱し、落ち着きを失ってしまい、思いました。「もし私が次のように考えたら、どうでしょうか。我々は罪人ではなく、罪の責めを負うものでもない、としたら。私は過ちを犯し、この真理を知ること

ができていないようです。そしてもし、我々が罪人で、責めを負わなければならないのであれば、よき主よ、もしそうなのであれば、私があるあなたのうちにこの真理を目にすることができないのは、なぜなのでしょう。私の神であり、私の造り主であり、私がすべての真理をあなた様の中に見ようと願っているお方でありですのに。なぜかという、3つの点が勇気をもって、私にそれを尋ねさせるのです。まず第1に、それがとても身近なことであること。なぜなら、高尚なことなら恐れをなしていたでしょう。第2に、それがとても普通のことであること。なぜなら、特別でひそやかなことであれば、また恐れをなしていたでしょう。第3に私がそれを知ることが必要としていたこと。なぜなら、私が思うに、もし私がこの世で生きていくのであれば、善と悪を知り、そうすることで理性と、恵みによって、善悪をより明確に分け、聖なる教会の教えるように、善を慈しみ、悪を憎むことができるようになるからです」私は力の限り心の中で叫び、次のように考えながら、神のご助力を求めました。「おお、主なるイエスよ。至福の王よ。私はどのようにすれば心の安らぎを得ることができるのでしょうか。知る必要があることを、どなたが私に教え、語って下さるのでしょうか。もし、今、そのことをあなた様のうちに見ることができないのであれば」

51

先の疑念に対する、主人としもべの驚くべきたとえ話による答え。そして、神は待たれることをお望みであること。なぜならば、その女がこのたとえ話を十分に理解するまでには、ほぼ20年の歳月を要したのであるから。そして、キリストが父なる神の右側に座しているのは、どのように解されるべきか——51章。

そしてそれから、我々のやさしき主が、とても比喩的に、主人としもべのすばらしきたとえ話をういてお示しになり、お答えになりました。そして、そのふたりの光景を私の心に見せて下さいました。その光景は、主人のうちにおいて2重の意味をもつもので、またしもべの側においても2重のものでした。そして、一方の光景は霊的に肉の姿で示され、もう一方のものはより霊的に、肉の姿を伴わずに示されました。

そしてその第1。私はふたりを肉的な姿で見ました。つまり主人としもべです。これによって神は、私に霊的な理解を授けて下さいました。主人は、威厳に満ち、ゆったりとくつろいで座っています。しもべは、主人の前に恭しく立って、いつでも主人の意のままを行なおうと準備万端です。主人はとても愛情のこもった優しいまなざしをしもべに注ぎ、そしてしもべに自らの意思を実行させるべく、ある場所へとやさしく遣わします。しもべは、ただ赴くのではなく、突如として跳ね起き、自らの主人の意思を果たさんがために大急ぎで走っていきます。まもなく、しもべは草で転び、ひどい大けがをします。するとしもべは、うめき、わめき、泣き叫び、身もだえしますが、立ち上がることができず、手の施しようがありません。そしてこの中で、私が見て取った一番の問題は、助けがなかったことです。なぜなら、しもべは自分のすばらしき主人に目をやるべく、顔を向けることさえもできませんでした。しかもその主人の方は、すぐ近くにおり、十分な慰めが主人には用意されているのです。ですが、その時は弱々しく思慮に欠ける人間であったため、しもべは自分の

感情に支配され、嘆きに身を任せ、嘆いているうちに、7つの大きな苦痛を経験しました。第1は、転んだ時にできた大きな傷。それは感じるができる痛みでした。第2には、体の重さ。第3には、この2つから生ずる弱さ。第4には、理性の光を失い、そして心を失い、自分自身の愛をもほぼ見失ったこと。第5には、立ち上がることができなかつたこと。第6には、これが私にはとても驚きだったので、ひとり横たわっていたこと。私はあちこち見回し、目を凝らしてみました。遠くも、近くも、上手も、下手も。それでも、しもべを助けてくれるものは何ひとつありませんでした。第7には、しもべが横たわっていた場所は、広く、固く、恐ろしい場所であったこと。私は、このしもべが、そこでこの辛さを従順に耐えしのぐことが一体どうしたらできようかと思いました。そして私は、しもべになんらかの落ち度があったのか、あるいは主人がしもべになにかの責任を押し付けるのかどうなのか、知りたいと思い、じっくりと見つめました。そして、そこには本当のところ見るべきものは何もありませんでした。なぜなら、しもべの善き思いと大いなる願いが、しもべが転んだ理由だったので。そして、しもべは主人の思し召しを果たそうとその前に立った時と同じく、内心無邪気な善き心根だったので。

そしてまさしく同じように、しもべの主人も、常にやさしくしもべを見つめていました。そして今や、ふたつながらの表情をお示しです。ひとつは、外面的なもので、とても謙虚でやさしく、大いなる哀れみと同情をもったもの。そしてこちらが第1のもので。もうひとつが、より霊的なもので、こちらは私の心を主人の中へと導きながら示されました。そして私は、このことを主人がとても喜んでるのを目にしました。というのも、主人は、あふれんばかりの恵みで、誉れ高き安息と高潔さへと、しもべをもたらすことを願い、またそうするのです。そしてこちらが、2番目に示されたことで。さて、そして私の心は、両者を心にかけてながら、再び第1の方へと導かれていきました。それから、やさしき主人が心のうちを語ります。「ああ、ああ、我が愛しきしもべよ。私への愛ゆえに私に仕えるために、しもべはなんという怪我と痛みを被ってしまったことか。そう、それも良心故のものなのだ。しもべの叫びや恐怖、怪我や負傷、そしてあらゆる悲痛に報いるのは十分ではないのだ。それだけではなく、どこにも怪我がなかった場合よりも、しもべにとってよりよく、より誉れとなる贈り物をするのが、私にはふさわしいのではなからうか。そうしなければ、しもべに礼を尽くしたことはないだろう」そして、この点について、主人の心持ちの霊的な啓示が私の魂に降りてきました。その中で、私は主人の偉大さと、主人自身の誉れを考えれば、主人が敬愛する立派なしもべは、転倒しなかつた時より以上に際限なく、ふさわしくそしてこの上なく、報われるのがもっともだと、私には思われました。そうです、そのようにして、しもべの転倒とその時に味わった辛さは、ありがたくすべてに勝る誉れと、尽きせぬ至福へと変るのです。

そしてこの時点で、たとえ話の啓示はやみました。こうして我らが善き主は、私の心に光景をお示しになり、導いて下さり、啓示は終りを迎えました。しかし、このようにいろいろとお導きいただいたわけではありますが、このたとえを目にした驚きは、決して消え去りはしませんでした。なぜかという、それは私の願いに対する答えとして与えられたわけなのですが、私は依然として、当時その答えに十分に得心することができなかつたのです。なぜなら、後で述べますが、アダムとして示されたそのしもべに、私は数多くの特質を目にして、ひとりのアダムにそれらを帰することがとてもできなかったからです。ですから、当時、私はほとんど何も分からないような状態でした。なぜなら、この驚くべきたとえ話の十全な理解は、当時の私には与えられなかつたのですから。

そしてこの難解なたとえには、啓示の中にみられる3つの特質が、まだ大いに隠されているのです。そしてそれにも関わらず、私はどの啓示にもたくさんの秘密が含まれていることを目にし、理解しました。ですので、私が幾らか慰められた3つの特質について、今ならお話ししてもよろしいでしょう。第1は、時を同じくして私がそこに理解した、教えの始まり。第2に、私がそこにそれ以降理解した内的な教え。第3に、始めから最後まで啓示全体、すなわち、この書全体。それを我々が主である神は、時に寛大に、私の心の目にお示し下さいます。そしてこれら3つはとても密接に結びついており、私の理解では、それらを分けることは不可能ですし、やって出来るものでもありません。そしてこれら3つをひとつとして、私は我々が主である神を信じ、信頼すべきなのです。そして、神がそれをお示しになったその同じ善から、そしてまったく同じ目的のために、まさしく同じ善と目的のために、み心になう時に、神は我々に明確にそれをお示しになるのです。この啓示以来、20年になるまでには3か月足りませんが、私は内的な教えを受けました。それは次のようなものです。「汝は、たとえ話の中に示されたすべての特質や特性に注意を向けるがよい。たとえそれらが汝の目には霧がかかったようで、おもしろ味がなかったにしても」私は、大いなる望みを持って同意し、当時示されたあらゆる点や特質を、私の頭と心があたうる限り、うちなる目でよくよく見つめました。まず初めに見つめたのは、主人としもべです。主人の座り方、座っている場所、お召し物の色と形、そして外に見える顔色と、うちなる高貴さと善。しもべの立ち方と、どこにどのように立っているか、また着衣の様子、色と形。外見の様子と、内的な善、およびなんでも進んでおこなう心掛け。

威厳に満ちてゆったりと平安のうちに座している主人は、神である、と私は理解しました。主人の前に立っているしもべは、アダムとして示されたものだ、と私は理解しました。つまり、当時は、ひとりの者が示されたのです。そしてその者が転んだことが示されたのは、それによって神が、人間とその堕落をどのように見ているかを理解させるためでした。なぜなら、神の目にはすべての人はひとりであり、ひとりがすべての人であるからです。この男は力をそがれ、とても弱々しくさせられました。そしてその男の心は打ちふさがれたのです。なぜなら、その者は自分の主人を見つめることをやめてしまったからです。ですが、彼の意味は、神の目には、完全なまま保たれていました。なぜなら、私は、その者の意思が我々の主にたたえられ、認められるのを見たからです。ですが、その者自身は、邪魔をされ目をふさがれ、このみ心を知ることがありませんでした。そしてこのことはその者にとって、大きな悲しみであり、またひどい苦痛でした。なぜなら、その者には、自分のすばらしい主人を目にする機会がありません。その主人はその者にとって、とても謙虚で心やさしいお方なのです。そしてまた、その者は、自分がすばらしい主人の目にどのように映っているか、本当に知ることがありませんでした。そして、私はよく承知しておりますが、この2つを、懸命に、そしてまた本当に目にさえすることが出来れば、我々はこの世でいくばくかの安息と平安を手にすることができるものなのです。そして、主のあふれんばかりの恵みがあれば、天上の完全な至福も、手に入れることができるものなのです。そして、これが、この時に主が我々の罪をどのようにご覧になっているかという教えを、私が目にした始まりでした。そしてその時、ただ苦痛のみが、責め、また罰することをなし、我々のやさしき主は、いつでも魂にこやかな表情を見せ、愛して下さりながら、我々を至福へと導くことを願いつつ、慰めを下さり、悲しんで下さるものなのである、ということ私を理解しました。

我々の主がお座りになった場所は、簡素な所でした。砂漠の不毛な大地の上でした。おひとりで、荒野の中に。主のお召し物はゆったりと、たっぷりとしたもので、主人たる人物にたいそうふさわしいものでした。主のお召し物の色は、空のような青い色で、とても色が濃く、すばらしいものでした。お顔には慈悲があふれ、お顔の色はすてきな茶色で、恵み深い特徴を備えておいででした。目は黒で、とてもきれいですばらしく、はなはだ美しい哀れみをたたえていました。主のうちには、高貴で安全な場所があり、広くて長く、尽きせぬ天国であふれんばかりでした。そして、しもべを絶えず見つめていたすばらしい表情は、そして特にしもべが転倒した時のものは、愛のために我々の心を溶かし、あまりの喜びのために我々の心を2つに裂いてしまうのではないかと思われました。そのすばらしいお顔の様子は、見目麗しく、上品な混合物でした。ひとつは、慈悲と哀れみの、もうひとつは喜びと至福との。喜びと至福は、天が大地の上にあるように、慈悲と哀れみをはるかにしのぎます。哀れみは地上のもので、至福は天上のもので。父なる神の慈悲は、アダムの墮落に関するもので、アダムは、父のもっとも愛する生き物です。喜びと至福はありがたいき子のもので、その子は父と並ぶものです。この神々しい慈悲の表情からあふれくるまなざしが、地上を満たし、アダムとともに地獄へと至り、その絶えざる哀れみが、アダムを無限の死から救ったのです。そして、この慈悲と哀れみは、我々が天に至る時まで、人類とともにあります。ですが、人はこの世では盲目であり、よって我々の父である神の姿をあるがままに目にすることができません。そして、父が善意から人に姿をお示しになる時はいつでも、父は人の形を借りて、親しみやすくお姿をお示しになります。私は本当のところは理解できませんでしたが、我々は父は人ではないということを知り、信ずべきなのです。しかし、父が砂漠の不毛な地面に腰を下ろしていたことは、次のことを表しているのです。父は、人の魂を父自らの街、住まいとなさり、そのことは、父のすべてのみ業のうちで、もっとも父が喜んでいることなのです。そして、人が悲しみや苦痛にさいなまれたとき、父はその高貴な役割を、いつでも喜んで果たすというわけではなかったのです。ですから、我々の優しき父は、特別な場所を用意することなく、人類を、すなわち地にまみれた人々を、ありがたいき子が、父の恵みを得て、たいへんな苦労をもって、父の街をあがない、高貴ですばらしいものにする時を待ちながら、地面に腰を下ろしていたのです。

お召し物の青さは、父の終始変らぬ不変性を表しています。すてきな黒い瞳をもった美しいお顔の茶色は、神聖な謹厳さを正に体現しています。あたりに美しく光を放っていたお召し物の大きさは、父があらゆる天と喜びと至福をうちに秘めていることを表しています。そしてこれは私が、「私の心が主の内側へと導かれました」と述べた際に、一瞬示されたのでした。その時、主が望み、しもべを豊かな恵みによって誉れ高く復活させることを目にしたのです。

それでも私は、以前に述べたように、主人としもべを見つめながら、不思議に思っていました。私は主人が、威厳に満ちて腰をおろしていて、その前にしもべが恭しく立っている姿を目にしました。この中で、しもべは2重の意味を持っているのです。ひとつは外的なもの、もうひとつが内的なものです。外面的には、しもべは働くのに適した労働者の簡素な衣服を身にまとい、主人のすぐ近くに立っていました。ですが、それは真ん前ではなく、ちょっと横、少し左側でした。しもべの服は、白いチュニックで、一重のもので、古くて擦り切れており、しもべの汗が染み付き、体にぴったりとしていて丈が短く、膝の下、手のひらひとつ分ほどで、みすぼらしく、すぐにも擦り切れて、まもなくぼろぼろになって破れてしまいそうでした。そしてこれを目にして、私は驚き、よくよく

考えてみました。「こんなにも立派な主人の前に立ち、こんなにも愛されているしもべにしては、これはあまりにも不釣り合いな服装ではないか」

そして内的なものです。しもべの内面に愛の基が示されていました。しもべが主人に対して持っている愛とは、主人がしもべに対して持っている愛とまったく同じものであったのです。しもべの英知は、なすべきことはひとつだけ、主人の誉れとなるべきことのみだ、と内的に理解しました。そして、しもべは、愛のため自らのことなど顧みず、自分に何が起ころうとも気にかけず、大急ぎで出発し、走り出したのです。主人の命により、主人の願いを果たし、主人の誉れとなることをなすために。なぜなら、しもべの外面的な服装からすると、長期間にわたってずっと働き手であったようですが、私が内的に目にした、主人としもべの双方の内的光景によると、しもべは新人のようで、それはつまり、新たに働きだしたばかりのようで、そのしもべはそれまでには使いに出されたことが全くなかったようでした。地中には、主人が好きな宝物が埋まっていました。私は、それは一体なんであろうかといぶかりました。すると、心の中に答えが浮かびました。「それは、主人にとってうれしく心地よき食物なり」なぜならば、私は主人が一角の人物として腰を下ろしているのを目にしましたが、主人には食べ物も飲物も、何も供されてはいませんでした。これがひとつの驚きです。もうひとつの驚きは、この威厳に満ちた主人には、たったひとりしかしもべがおらず、そのひとりを使いに出してしまうということです。私は見つめて、一体しもべがするのは、どんな仕事なのだろうかと考えました。すると、しもべが行うのは、もっとも大変で一番苦しい労働に違いない、と思われました。しもべは庭師に違いないと。穴を掘り、水路を付け、苦労して汗を流し、地面を掘り返し、水脈を探り、必要な時に水をまく。そしてこのように、しもべは労働を続けることによって、すばらしい水を絶やさず、気高くあふれんばかりの収穫物を実らせ、それをしもべは主人の前へと持っていき、主人の気に入るように食卓を整えるものなのです。そしてしもべは、主人の気に入るように食事の用意がすっかり整うまでは、決して立ち戻ってはいけません。そして、すべての準備が整ったら、しもべは出来上がった食事を携え、食事に飲物を添えて、とても恭しく主人の前へと食事を運ぶのです。そしてその間ずっと、主人は同じ場所に腰を据えて、自らが送り出したしもべを待つものなのです。

ですが、このしもべがどこからやってきたのか、私は不思議でたまりませんでした。なぜならば私は、主人は自分自身のうちに永遠の生命と、ありとあらゆる善をお持ちで、欠けているのは地中に埋もれている宝物だけで、それは主人のうちにあり、尽きせぬ愛の驚くべき深奥に礎をおいているものだ、と私は理解したからです。しかし、このしもべがすっかりと立派に準備を整え、主人自身の前になんか持って来るまでは、これはまったく誉れではありませんでした。そして主人がいなければ、そこはただの荒野にすぎない場所だったので。また、私はこのたとえが言わんとするところを完全には理解できませんでした。そして、私はしもべがどこからやってきたのか不思議でした。

しもべには、三位一体のうちの第2の位格が、込められているのです。そして、しもべはアダムを表しており、それはすなわち、すべての人類を表しているのです。ですから、私が「子」という時、それは父なる神と全く同等の神性を意味し、また私が「しもべ」という際には、それはキリストの人性を意味し、それはすなわち義しきアダムなのです。しもべが近くに立っていることによって、子であることが理解され、また左側に立っていることから、アダムであることが分かります。

主人は父なる神です。しもべが子、すなわちキリストであるイエスなのです。聖霊は両者のうちにある同等の愛です。アダムが墮落したとき、神の子は転倒しました。なぜならば、天でなされた義しき結合故に、神の子はアダムからはなれることができなかったのです。なぜかという、アダムによって、私はすべての人を理解するからです。アダムは、生から死へと、このあさましい世の淵へと落ち、後に地獄へと落ちました。神の子はアダムとともに、乙女のお腹の中の深みへと落ちました。それはアダムの一番すばらしい娘だったのです。ですから、アダムを、天上と地上でのとがから解き放つこととなりました。そして、神の子はアダムを力強く地獄から救い出したのです。

しもべのうちなる英知と善からは、神の子が理解されます。左側に立ち、身にまとっている働き手としての粗末な衣服は、人性とアダムを表しています。そしてそれは、あとに続く、罪と弱さをも備えています。というのも、この一連の中で、我々がよき主は、ご自身の子とアダムをお示しになり、しかもそれはひとりのうちに示されたのです。我々に備わっている力と善は、イエス・キリストに発します。我々に備わっている弱さと盲目さは、アダムに発します。そしてこれらふたつが、しもべのうちに示されたのでした。

このようにして、我々が善き主、イエスが、我々の罪を背負われたのです。ですから、我々が父は、自らの子に、すなわちありがたきキリストに、罪を負わせる以上に我々に罪を負わせることはできませんし、しようともなさりません。このように、キリストは地上に降り来る前は、人類を再び天国へと連れ戻すという誉れ高きあの行いを成すために、父がキリストを遣わすその時まで、準備万端整えて、父のみ前にたたずんでいるしもべでした。つまり、神性については父と同じくキリストは神であるにもかかわらず、父のご意思を果たすために、人を救うために人となる、という先見の明ある目的をもって、キリストは父のみ前にしもべとして立ち、喜んで我々が負うべき責めを背負われたのです。そしてその後、キリストは、父の命によって喜々として走り出し、まもなく、とても低いところへと、乙女のお腹の中へと、落ちました。自分自身のことなどまったく顧みず、自分の苦痛など一顧だにせずに。着ていた白いチュニックは、肉体を表しています。一重であるのは、神性と人性の間に全くなにももの介在しないことを表しています。ぴったりとしているのは、貧しさを。古さは、アダムが着用していたことを。汗で汚れているのは、アダムの苦難を。丈の短さは、しもべの労働を示しています。

そして、子が立ったまま、心の中でこのように言うのを、私は目にしました。「さあ、我がいとしき父よ、我はあなた様のみ前にアダムのチュニックをまとい、走り出す準備をすっかり整え、立っております。あなた様の誉れをなすため、あなた様が我を遣わしたき時に、我は地上に参らん。いかほどの期間を我は望むべきか」全くもって実に、いつ父がお望みになるか、どのくらいの期間をお望みか、子は知っておりました。すなわち、神性に関することなのです。なぜなら、子は父の英知なのですから。したがって、このように、キリストの人性に関する理解が示されました。キリストのありがたき托身とこの上ない受難によって救われるべきすべての人類にとって、すべてはキリストの人性にかかっているのです。なぜならば、キリストは頭であり、我々が手足なのです。そしてその手足には、いつさまざまな仮の苦しみや悲しみが終りを迎えるか、いつ永遠の喜びと至福が成就するか、その日時は知らされていないのです。また、その日と時間を知りたいと、天国の一団は願っているのです。そして、天国へと至ることになっており、天の下にいる者たちにとって、そこへ至る道は、望み、願うことなのです。その願いと望みは、主人の前に立つしもべによって示さ

れました。あるいは、別の言い方をすれば、アダムのチュニックを着て父なる神の前に立っていた子において示されました。なぜならば、救われるべきすべての人類の苦悩と願いが、イエスのうちに現れたからです。なぜなら、イエスが救われるべき者であり、救われるべき者みな、イエスなのです。そして、すべては神の愛によって、我々にふさわしい従順さと謙虚さ、そして忍耐と徳をもってなされるのです。また、この驚くべきたとえの中に、私に対する教えが含まれています。それはまるで、初歩の手ほどきのようなもので、なんとかいくらかは、我々が主のみ心を理解できるのではないかと思われまゝです。なぜかという、啓示の神秘の部分がそこに隠されているからです。もっとも、啓示というものには神秘であふれているものなのですが。父が座していることは、父の神性を表しています。それはつまり、安息と平安を示しています。なぜなら神性は、いかなる労苦をも伴わないからです。そして、父自身が主人の姿で現れたのは、我々の人性を表しています。しもべが立っていたことは、労苦を表現しています。片側によって、左側であったことは、しもべが主人の真っ正面に立つには値しなかったことを表しています。しもべが走り始めたことは、神性を、走ったことは人性を、表していました。なぜなら、神性は父に始まり、乙女のお腹の中へと至り、我々の本性となるからです。そしてこの落下の際に、父はたいへんな苦勞をしました。父が経た苦勞は、我々の肉体であり、そこでまたとても激しい苦痛を味わったのです。主人の前で、畏れを抱いて、しもべが真っ正面でないところに立っていたのは、しもべの服装が主人の真っ正面に立つには値しないものだったことを表しています。しもべが働き手のうちは、それは不可能ですし、すべきではないことなのです。また、しもべは、苦勞して働き、自らの平安を正当な手段によって手に入れるまでは、安息と平安のうちに、主人とともに座することも許されはしないのです。そして、左側にいたことによって、父が望んで、容赦せずに自らの子を、人のまま、人のあらゆる苦痛を味わせたことを表しています。チュニックがところどころボロボロになって、裂けていたのは叩かれ、むち打たれ、とげや釘に引っかかり、引っ張られ、引きずられ、柔らかな肉が裂けたことを表しています。私が幾分か見たように、肉は頭蓋骨から引きはがされ、流血が終るまでには、切れ切れになりました。そしてそれから、また乾き始め、骨に凝り固まったのです。そして、転げ回って身もだえしたこと、嘆き悲しんだことは、乙女のお腹に落ちた時から、肉体が殺され、死して、自分が救うために送られたすべての人々といっしょに魂を父のお手にお返りするまでは、決して力強く昇ることができなかったことを表しています。そして、この時になってはじめて、子が力を示し始めます。なぜなら、地獄へ行き、そしてそこで、深淵の底から、高貴な天上で自分に結び合わされた、大きな根っこを引き上げたからです。体は復活祭の翌日まで墓の中にあり、それ以降は、横たわっていることはもはやありませんでした。なぜなら、転げ回り、のたうち回り、嘆き悲しむことに義しく終止符が打たれたからでした。そして神の子が引き受けて下さった我々の邪悪で罪深い肉は、それはアダムの古びたチュニックで、窮屈で、みすばらしく、丈が短かったのですが、その時になって我々が救い主によって、作り直され、すばらしいものとなりました。白く、明るく、尽きせぬ清浄さを持ち、ゆったりとしていて、父がお召しのところを私が目にした衣服よりも、よりすばらしく、凝ったものでした。なぜなら、その服は青でしたが、キリストの服は今やすてきにお似合いで、とてもすばらしく、筆舌に絶するような混合色だからです。なんとすれば、それがまさに誉れのすべて、そのものであるからです。今や、主は地上の荒野にお座りではありません。天上に納得づくでお造りになった高貴な街に座しておられます。今や子は、父のみ前にしもべとして畏れを抱きなが

ら、粗末な身なりで、一部裸で、立っているではありません。子は、父の真右に立ち、無上の喜びにあふれて立派な衣装を身にまとい、頭上には豊かで貴重な冠を載せています。なぜならば、我々が子の冠であると示されたからで、その冠は、父の喜びであり、子の誉れ、聖霊のお気に召すところとなり、天国の人々みな、驚くべき、終りなき至福なのです。今や、子は父のみ前で左側に働き手として立っているのではなく、父の右側に無限の安息と平和のうちに座しています。しかしそれは、この世で人が別の人と並んで座しているように、子が右側に座している、ということではありません。なぜなら、私の目には、三位一体の神にはそのような座り方はないからです。そうではなく、子が父の右側に座している、というのはすなわち、父の喜びの至高の極みのうちにある、ということなのです。さて、今や伴侶は、すなわち神の子は、尽きせぬ喜びの美しい乙女である、いとしき妻とともに平和のうちにあります。今や、まさに神であり人である子は、平穏と平和のうちに、自分の街に座しています。それは父が、無限の目的にかなうようにと、子のために整えたものです。父は子の中にあり、聖霊は父と子の中にあるのです。

* 本稿は Julian of Norwich (ノリッジのジュリアン) の *Revelation of Love* (愛の啓示) の長いバージョンの試訳、その第2部である。第1部(2章から14章)は、茨城女子短期大学紀要32集(2005: pp. 21-36)に掲載されている。次回の第3部で完結の予定である。